

2022. 11. 27 ウェブ公開版
2021. 5. 14 提出版
ブランディング推進研究PJ 報告書

「地域遺産」の理念構築 と その保全・継承に関する研究

2018～2020 年度
福山大学ブランディング推進のための研究プロジェクト

研究代表：佐藤圭一
(工学部建築学科/備後地域遺産研究会)

目次

1. 研究の背景と目的	1
2. 研究の方法	1
3. 備後地域遺産研究会（福山大学ひと・まち・くらしプロジェクト）	2
4. 明王院、別所砂留などの先行事例の地域協働による臨地調査	3
4-1 明王院と別所砂留	3
4-2 別所砂留を守る会	3
4-3 明王院を愛する会	4
4-4 文化財未満の建築の遺し方（旧福山市体育館）	5
5. 藺草栽培実践（本郷町・熊野町）による備後表の保全と継承	7
5-1 「備後藺草による備後表」のトレーサビリティ実証実験	7
6. 備後地域発祥の中継表の技術継承と織機復元	11
6-1 備後中継表を活かした福山大学未来創造館茶室「育志菴」	11
7. 鞆町を含む沼隈半島および島嶼部における地域遺産の「発掘」	16
7-1 備後中継表を活かした瀬戸内島嶼部・百島の商店再生	16
7-2 KN 邸リノベーション計画（鞆町重伝建古民家再生プロジェクト）	21
8. 福山市西部地域における地域遺産の「発掘」と地域デザイン	26
8-1 本郷島と長和島を中心とした松永塩田跡の変容(1962～2020年)	26
8-2 備後柿渋の製造工程に関する調査研究	32
8-3 地域遺産フォーラム（ギャラリー蔵フォーラム）	39
9. 備後地域内外に残る能舞台や能楽堂の予備調査と復元	45
9-1 福山旧城下町に現存する能舞台の復元的研究	45
－阿部神社能舞台と三蔵稲荷神社能舞台の保存と継承－	45
10. 備後地域外での建築、集落、風習など地域遺産比較調査	57
11. 結論	58
12. 今後の課題	58
13. 謝辞	58
14. 関連著書・論文等	59
15. 研究費等（研究代表のみ）	61
16. 協働事業契約	61
17. 主なメディア掲載など	62
18. あとがきにかえて	63

1. 研究の背景と目的

本研究は、『『地域遺産』の理念構築とその保全・継承に関する研究』（2018～2020 年度福山大学ブランディング推進のための研究プロジェクト）と題し、主に備後地域を対象とした地域協働の臨地調査に基づいて、地域遺産の「発掘」およびその保全・継承のための知見と指針を得ることを目的とする。備後地域外や先行研究も含めた地域遺産の事例調査を重ね、現在概念提示し、暫定定義している「地域遺産」とは何か、その理念構築を行うことを大きな目的とする。

3年間の研究計画であり、参与観察的に各事例の実態解明を進めて、「地域遺産」の理念構築という大目標の達成を目指す。本研究着手前から築いた地域との信頼関係を基に、学生・大学院生や大学と地域との真の協働方法を探ることも研究プロセスの一環である。学生メンバーを含む福山大学ひと・まち・くらしプロジェクト「備後地域遺産研究会」（以下、適宜「研究会」とする）の教育・研究・社会活動を核に、地域社会との連携によって研究推進するものである。その成果は、研究会が主催する地域遺産フォーラムなどを街場で開催して発表し、地域住民と直に対話することを通じて実践に移す。

「地から知に、知を地に」の永劫反復運動を本研究推進の原動力とする。

2. 研究の方法

研究目的を達成するために、本研究課題申請時に提示した以下 1～8 のテーマを中心に研究会のメンバーと共に臨地調査を実施し、事例調査結果から地域遺産の理念構築を行う。本報告書第 4～10 章が、調査テーマ 1～7 にそれぞれ該当する各論部分となる。

1. 明王院、別所砂留などの先行事例の地域協働による臨地調査
2. 藺草栽培実践による備後表の保全と継承
3. 備後地域発祥の中継表の技術継承と織機復元
4. 鞆町を含む沼隈半島および島嶼部における地域遺産の「発掘」
5. 福山市西部地域における地域遺産の「発掘」と地域デザイン
6. 備後地域内外に残る能舞台や能楽堂の予備調査と復元
7. 備後地域外での建築、集落、風習など地域遺産比較調査
8. その他、地域遺産に関する史資料収集と聞き取り



2018. 5. 15 先刈り前・初代看板



2021. 5. 2 先刈り・杭打ち・網掛け後・2代目看板

図 2-1 福山市本郷町圃場

3. 備後地域遺産研究会（福山大学ひと・まち・くらしプロジェクト）

本研究の実施主体となるのは、福山大学建築学科佐藤ゼミ（地域生活空間計画研究室）を中心とした学生メンバーも含む「備後地域遺産研究会」である。研究会は、2015年4月、研究代表の福山大学着任時に任意に立ち上げたものである。研究代表は、南アフリカをフィールドとしたヨーロッパ近代植民都市計画を専門とし、「都市計画」を主な研究テーマに掲げていた。都市を支える「水道」を追っているうちに、ひよんな事から水道水源を求めて熊本の山間地に入り、そのフィールドで「地域遺産」¹という言葉がふと思いついた。当時の学生達と2012年頃に「地域遺産研究会」を立ち上げたのが本研究会の起源である。2016年度から学部横断の福山大学ひと・まち・くらしプロジェクトに編入して、メディア・映像学科の中嶋健明教授がメンバーに加わった。これにより、福山生まれの福山育ちの研究代表や地元出身者が多い学生には見えなかった鞆町をはじめとする備後地域の魅力に改めて気づくことができた。研究会は、文理融合、超領域的分野の教員と学生・大学院生、地域住民との協働による活動を趣旨とし、地域のヒト・モノ・コトを総合的にデザインする実践をともなう活動である。自律した地域活動と専門性をもつ本学学生・教員との協働が軸となり、地域遺産の「発掘」そのものが、研究会の活動目的の重要な部分である。

研究会が暫定的に概念提示する地域遺産とは、「有形無形を問わず、地域の人々が守り、後世に伝えたい地域の至宝」という漠としたものである。それまでの事例調査から研究代表が導いたものであり、ユネスコの世界遺産が、人類が共有すべき「顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value）」を掲げることへの批判的考察から提示したものである。同じユネスコの制度でも、「卓越性」を重視せず地域独自の文化を尊重し、遺産の継承を担保するコミュニティの存在を重要視する無形文化遺産制度²に近い考えである。この「地域遺産」の規定は仮説であり、研究会の継続的な教育・研究・社会活動を通じて常に再構築し、地域遺産の保全と継承、そして活用にあ資する理念構築を行うことが重要と考える。備後地域の歴史と文化、生活に深く根ざした空間計画を方法として、地域のヒト・モノ・コトをデザインする実践を通じて、今まさに危機にある地域遺産を保全・継承することを活動目的とする。

これまでの研究会の活動については、安全安心防災教育センターの年次報告書（2016～2019年度）に記載している。各年次の主要活動テーマは、2016年度「備後表、明王院、別所砂留」、2017年度「備後表、無花果+蔵、備後柿渋、能舞台」、2018年度「沼隈半島～瀬戸内島嶼部」、2019年度「福山市西部地域」であり、本研究課題とも密接な関係をもつ。2020年度は未報告であるが、本研究課題でも取り上げた「松永塩田と備後柿渋」が主な活動テーマとなった。コロナ禍で遠隔地への移動が困難な社会情勢の中、活動フィールドを福山大学に近接する福山市西南部に絞った経緯もある。



図 3-1 はじめての蘭植え
(2016. 11. 26 福山市本郷町圃場)

¹ 地域遺産という言葉は様々に使われているが、学術用語としての明確な定義はない。例えば、日外アソシエーツ編：事典 日本の地域遺産—自然・産業・文化遺産、日外アソシエーツ、2013、同その2、2021などが出版されている。

² 2021年4月、日本の文化財保護法が改正され、無形文化財と無形民俗文化財の登録制度が新設された。1996年の改正で、建造物などの有形文化財の登録制度が先行している。「登録」は「指定」より規制の緩やかな制度で、保存だけでなく外観の一部改変等による現代的活用を見込んだものである。しかし、既に12,000件以上が登録され、その保全・継承には課題も多い。

4. 明王院、別所砂留などの先行事例の地域協働による臨地調査

4-1 明王院と別所砂留

明王院（福山市草戸町）と別所砂留（福山市芦田町）については、研究代表が福山大学に着任し、備後地域遺産研究会を発足させた 2015 年度の当初から、関わり続けている。牧歌的な学生ボランティア活動ではなく、あくまで建築の高度な専門性をともなった教育と研究の一環である。学術調査に関しては、明王院は本堂と五重塔に関する国宝修理工事報告書があり、別所砂留は岡山大学の研究グループが継続的に調査研究を行っている。本研究課題においては、研究期間内に新たな短期成果を求めるためのフィールドではなく、地域遺産の保全・継承に関する継続的な活動について、比較考察の対象として長期的な視点で参与観察を継続している。福山大学建築学科の日本建築史などの授業や研究会において、見学会や現地作業補助、調査を毎年継続していたが、いずれも 2020 年度は現地を訪れることができなかった。

いずれも強烈なリーダーシップを元に、地域住民が強固に団結して、長期にわたる活動を自発・自律的に行っている希有な事例である。



図 4-1 三谷氏と明王院庫裡にて



図 4-2 光成氏を囲って別所にて



図 4-3 徳岡氏とギャラリー蔵にて

4-2 別所砂留を守る会^{注3}

地域住民有志の手によって、近年、「発掘」された国内最大級の近世の砂防ダム群が「別所砂留」（福山市芦田町）である。五入堂川（有地川支流）流域に、現在大小あわせ 30 基以が周辺の土砂の下から掘り出され、良好な状態で確認されている。他の近世福山藩築造の砂留群とあわせ、備後地域で発達した石積み技術を伝える超一級の文化財（指定も登録もない）でもある。2016 年 6 月の大水害では、下流の溜池は決壊して被害が出たが、砂留群はほとんど無傷であり、築造から 300 年を経た現在でも本来の機能を果たしていることが実証された。無骨なはずの石積みが人を魅了するのは、その内に生命維持という機能美の極致を湛えるからであろう。2009 年 11 月にわずか 2 人で始めた地道な保全活動は、次第に地域住民を巻き込み、2015 年には、「別所砂留を守る会」（光成良秀会長）が結成されて組織化されている。研究会では、年間を通じて、守る会の周辺整備活動に参画している。2015 年の土木学会「選奨土木遺産」認定に続き、地域住民や学生と守る会の協働などによって、2016 年度土木学会「市民普請大賞」グランプリ受賞に輝いた。微力ながらも、研究会の活動も受賞に寄与したと聞いている。

学術調査に関しては、岡山大学大学院の樋口輝久准教授（土木史）の研究室が中心となって行われており、土木学会による評価は高い。しかし、それ以前は一般の知名度はほとんどなく、近隣住民でさえその確かな存在と価値を知ったのは 2010 年代になってからである。守る会にはわ

³ 本項は、以下を基に加筆修正したものである。佐藤圭一：「地域遺産」としての備後表、明王院、別所砂留 一備後地域遺産研究会 2016 活動報告一、安全安心防災教育研究センター活動報告書 2014-2016, pp.24-27, 2017.2

ずかな助成金の他に活動資金はなく、守る会の強い結束と意思だけで実に壮大な周辺整備が日々行われている。全てを掘り出すことが文化財保護とはならない可能性もあり、防災の観点からもさらなる議論が必要である。縦割りを廃した文化財保護政策が望まれる。また光成会長自身は、「自分が生きている間は文化財などに指定・登録しないで欲しい」と語ったことは、地域遺産の保全・継承のあり方に一石を投じる重い言葉である。

なお、別所砂留の「発掘」に触発され、近接する大谷地区でも砂留が数多く見つかかり、「大谷砂留」としてこれを保全・継承しようと別の住民グループが活動を始めている。



図 4-4 別所砂留での整備活動・見学会案内 (2018. 12. 16, 2019. 3. 30)

4-3 明王院を愛する会^{注4}

中道山円光寺明王院(福山市草戸町)は、本堂(1321年建立)と五重塔(1348年建立)がそれぞれ国宝建造物に指定されている。広島県内7件の国宝建造物のうち、備後地域には尾道市の浄土寺本堂と多宝塔、向上寺三重塔をあわせ、5件が存在する(他は厳島神社と不動院金堂)。古都を除けば、日本屈指の国宝建造物密集地域と言っている。明王院本堂は、建立が鎌倉時代まで遡れる日本最古級の折衷様の中世本堂であり、その細部意匠や構造の大胆さは他に類をみない。門前の草戸千軒町遺跡とあわせてその歴史的価値は非常に高い。しかし、これまで明王院は、備後地域在住者にもその実態はあまり知られておらず、一般向けに開放される機会も少なかった。2013年に、地元住民を中心に「明王院を愛する会」(三谷干城会長)が結成され、毎月第3土曜日には非公開の県指定重要文化財の書院や庫裡の内部が公開されるようになった。五重塔初重に不動明王、愛染明王と共に鎮座する弥勒菩薩坐像(2016年10月に錯誤であった「大日如来坐像」から名称変更)は、33年に一度公開の秘仏であったが、毎年12月に開扉、一般公開されている。地域に開くという片山弘雄院家の意向と、愛する会の三谷会長をはじめとするスタッフの献身的な活動によるものである。研究会では、地域遺産としての古建築の価値を学び、建築専門ガイドとしての活動を目指している。

現在、庫裏や書院に敷かれている畳表は、藁草が原料のものではなく新建材であり、また国宝本堂外陣に仮設的に敷かれているものも同様である。全国の国宝や国指定重要文化財、宮内庁関係建造物修理に優先され、地元の畳職人は備後藁草に触れたことがなく、地元の最重要文化財には備後表が使われないという皮肉な事態が起きている。このままでは地元文化財の真の価値継承は難しい。厳しい管理(トレーサビリティ)を前提とした流通量の安定確保による適正価格の設定が、備後表の保全、継承には必要不可欠である。備後地域の文化財修理等において、「備後藁草による備後表」の優先流通ルート構築も検討に値する。木造建築様式や木材料には造詣深い古建築や文化財の専門家、また建築史研究者でも、仮設的な畳という建材には驚くほど関心がない。

⁴ 本項は、以下を基に加筆修正したものである。佐藤圭一：地域遺産としての備後表、明王院、別所砂留 一備後地域遺産研究会2016活動報告一、安全安心防災教育研究センター活動報告書2014-2016, pp.24-27, 2017.2

昼表生産者と建築設計・施工業者をつなぐ建築専門家の必要性を痛感している。

研究会では、一般向けに、現地で建築専門ガイドを担うために、それぞれ国宝指定の塔と本堂を擁する明王院と浄土寺（尾道市）において、宮大工徳岡秋雄氏（徳岡工務店、三次市）による古建築現地研修会などを行い、知識と技術を深化させてきた。徳岡氏は徹底した調査研究に基づいて、寺社建築の復元設計と施工を一貫して行える全国でも数少ない宮大工棟梁である。近年、福山市内に寺社建築専門の一級建築士事務所「徳岡伝統建築研究所」（設計部次長徳岡旭氏）も開設されるなど、備後地域では無比の存在である。現在の大学建築学科のカリキュラムに古建築設計はもちろんなく、研究会では継続的に大学近隣にある貴重な現場にて知識と技術を教授いただいている。

2021年、明王院は本堂建立700年を静かに迎えた。



図 4-5 徳岡氏による明王院・浄土寺現地研修会（2018. 8. 16, 2019. 6. 15）

4-4 文化財未満の建築の遣し方（旧福山市体育館）

本項の文章は、『福山市体育館記録誌』（NPO 法人コミュニティルネッサンス研究所編，福山市スポーツ振興課，2021.3 出版準備稿・未刊行）という、旧福山市体育館の記録誌に研究代表が寄稿したものである。未刊であるが、本研究において、地域遺産の保全・継承や地域協働のあり方など、結論にも関わる長期の地域協働の事例として重要である。原文のまま引用する。

私は福山で生まれ、高校を卒業するまで福山で過ごしました。縁あって四半世紀ぶりに福山に戻った時には、すでに旧体育館の建て替えは決まっていたようでした。実家は西町で西小学校に通っていましたが、旧体育館は芦田川マラソン大会の待機場所だったと思います。それ以外、高校を卒業するまで、旧体育館でのイベントに参加した記憶はありません。旧体育館近くに勤めていた父は、独立して小さな縫製工場を南本庄に構えました。幼少の頃は配達に付いて行き、車に同乗して前の道をよく通っていました。当時は建築に興味もなく、古びたコンクリートの建物という以外の印象はありませんでした。

2015年4月に福山に戻り、大学で建築史を教えるようになって6年が経ちます。奇妙な構造デザインで、福山に現存する数少ない貴重な近代建築だとは思っていましたが、直接関わることはありませんでした。にわかはこの建築に興味をもったのは、数年前、明王院を愛する会の三谷干城会長から「ふくやま科学みらい館」（以下、福山科学館）プロジェクトについてお聞きしたときでした。旧体育館跡を想定して、福山科学館の建築イメージを描いて欲しいという依頼でした。明王院の学生見学でいつもお世話になっている三谷さんのお願いでしたので、さっそく腕利きの学生に声をかけて作業に取り掛かりました。その後、現役大学院生として一級建築士合格の快挙を成し遂げる河田陽依菜さんが担当してくれました。この福山科学館構想の発端は、福山出身の元 JAXA・故木村雅文氏に因んだものでした。最初に構想を掲げた赤城博典氏の遺志を継いだ三谷さんの思いを聞きながら、

元の奇妙なフレームの記憶を残しつつ、これを半ば構造から切り離してリ・デザインした絵ができました。四隅に柱を立てるという建築の常軌を逸したもので、直方のガラス張り建築の四方の壁中央に円柱を配して、建物中心に向かって梁を繋ぎ元のフレームの形態を強調させたものです。常識に捕らわれない若い才能による大胆なデザインのパスは、独り歩きして様々に紹介されました。最初に福山科学館の建築イメージが提示されたのは、これが最初ではないかと思えます。

現在では、この福山科学館構想は福山市「子ども未来館」(仮称)に展開して、コンセプトづくりが行われ、2021年度中の基本構想策定を目指しているようです。ただ、利便のよい福山駅前などを想定しているようで、旧体育館との直接の関わりはなくなりそうです。建築がもつ記憶の力は大きいのですが、多くの形あるものは人知れずいずれ消えてゆきます。しかし、福山に「子ども未来館」が実現することで、旧体育館のもつ強烈な構造美の記憶は、大胆な一枚の絵によって継承されてゆくかもしれません。



図 4-6 2018.12 河田陽依菜デザイン (当時、福山大学建築学科 4 年)



図 4-7 旧体育館 (2021.5.9)

5. 藺草栽培実践（本郷町・熊野町）による備後表の保全と継承

5-1 「備後藺草による備後表」のトレーサビリティ実証実験^{注5}

5-1-1 背景と目的

2020年11月、「畳製作」を含む17の選定保存技術が「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」として、ユネスコ無形文化遺産に登録された。しかし、そこに藺草栽培や畳表製織など畳の原材料に関する技術は含まれていない。建造物漆塗りと日本産漆生産・精製、茅葺と茅採取、檜皮葺・柿葺と檜皮採取など、建築施工技術と原材料生産がそれぞれ選定保存技術となっているものと大きく様相が異なる^{注6}。

備後表は国宝建造物修理等にも使われる最高級畳表であるが、原料の備後藺草は絶滅の危機に瀕している。本項は、「藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明」と題する研究の一環でもあり、広島県東部の福山市を中核とする備後地域における藺草栽培の実践を通じて、備後表の生産（製織・加工）、流通、設計、施工の全プロセスを解明し、絶えつつある備後表の保全と継承のための知見と指針を得ることを大きな目的としたものである^{注7}。これまでの研究成果^{文献1)2)3)}を踏まえ、本項では、備後藺草の生産実態を明らかにすると共に、現在取り組んでいる「備後藺草による備後表」のトレーサビリティ実証実験について報告する。

5-1-2 備後藺草の生産実態（2020年冬期）

研究代表らは、地元農家（本研究では、参入形態を問わず藺草栽培の主体を「農家」とし、戸数で数える）と共に、2016年冬期の植え付けから備後地域における藺草栽培に関わり5シーズン目となる。広島県の藺草に関する作物統計は2015年までしかないため、それを補完する意味でも、栽培実践を通じて2016年冬期から悉皆調査や聞き取りを続けミクロな栽培実態を記録している^{文献1)}。2020年冬期（11～12月）の備後地域において、畳表の原料として藺草の植え付けを行った農家は3戸（2019年4戸、2018年5戸、2017年4戸、2016年5戸）、規模は合計6枚（2019年5枚、2018年6枚、2017年8枚、2016年8枚）で1haにも満たない。福山市本郷町では、2019年は僅か1戸1枚となったが、休耕していた1戸が2020年は3枚を植え付け4枚2戸となった。別の地区では、2019年までは協働していた2つ農家が1つの栽培主体になったと見なした。さらに別の地区においては、備後地域に2戸だけ残っていた伝統農家の1つが2020年に休耕した。

国産畳表の95%以上を熊本県が占めているが、その衰退も著しい。熊本県の藺草の作付面積は、毎年平均約40ha減少し、過去10年間で半減している。全流通量の8割を占める中国産藺草・畳表の一部を国産化するためにも、ブランド力のある備後表の継承は必要不可欠である。

⁵ 本項は、以下を加筆修正して再編したものである。佐藤圭一：「備後藺草による備後表」のトレーサビリティ実証実験 藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明その9、日本建築学会大会（東海）学術講演会、2021.9（投稿中・発表予定）

⁶ この論点については、2021年3月21日に、かつての備後藺草栽培の中心地の1つである広島県福山市西部地区において、「備後畳表をユネスコ無形文化遺産へ ー日本建築文化を守る歩みに学ぶー」（講師：佐藤圭一、主催：福山市松永生涯学習センター）と題して講演会を行い、地域住民と議論した。これを踏まえて、2021年6月20日には、「備後中継ぎ畳表の社会文化史 ーユネスコ無形文化遺産を超えてー」（講師：佐藤圭一、主催：福山城博物館）と題して講演予定である。

⁷ 2016年度から本研究に取り組んできたが、2020年度より、同名の研究課題をJSPS科研費20K04913（代表：佐藤圭一、2020～2024年度）においても実施している。

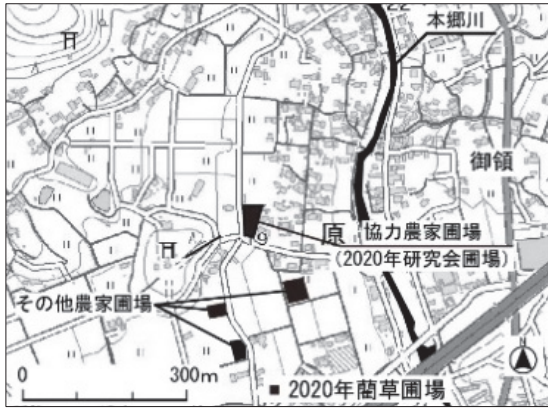


図 5-1 福山市本郷町の藺草圃場（2020 年冬期）



図 5-2 本郷町での一部手植え（農業系高校生も参加）
(2020. 11. 14)

5-1-3 トレーサビリティ実証実験

「藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明」に取り組むにあたり、2017 年に備後表の保全と継承のための 6 つの論点をあげた^{文献1)}。その 1 つが、「3. 品質管理システム(トレーサビリティ)の構築」である。また「6. 組織と制度の再構築」をあげ、その器となる備後表継承会（以下、適宜、継承会とする）を業界関係者らと 2018 年 4 月に設立した。継承会の事業目的 10 の内、「6. 備後表の品質保証システムの再構築」「7. 備後表のブランド再構築」がある^{注8}。現在、これらを実現するための「備後藺草による備後表」のトレーサビリティ実証実験を行っている。

絶滅危機の備後表の継承には、統計に表れないミクロな実態把握がまず必要である。そのためには、基礎研究と共に、藺草栽培から畳表生産・流通、建築設計・施工という藺草が建築化される全プロセスに関する実践研究が必要不可欠となる。現在、藺草農家と継承会、福山大学備後地域遺産研究会が協働し、藺草栽培を行いながら生産プロセスに直接参入することで、参与観察的に実態調査を行っている。藺草や畳表は農産物であるが、食物のような原材料の産地特定や明記は義務付けられていない。また、業界の商習慣もあり、国宝や重要文化財の畳工事においてさえも、藺草の栽培地や栽培者、製織者の情報が表に出ることはほとんどない。

2021 年 3 月までに 2 回の実証実験^{文献2)}を終え、4~5 月に 3 回目を計画中である。いずれの実験も、藺草栽培は(有)佐野商店（福山市芦田町）、畳表製織は研究会が備後三蔵動力中継織機^{文献3)}で行い、検証は継承会が行った。製畳に関しては、3 回とも異なる方法で実施する計画である。

5-1-4 証紙の織り込みシステム

実証実験における製織の際に、藺草の間に細長い証紙を織り込んだ。畳表への証紙織り込みは、広島県藺草生産組合連絡協議会が使用する「びんご生まれ」「びんご育ち」（いずれも登録商標）や熊本県いぐさ・畳表活性化連絡協議会による生産・加工者検索 QR コードなどがある。本実験の証紙には、織機名（畳表銘柄）、栽培地、製織者、製畳者（畳床材料、縁材料）、施工物件、原草地、収穫年、選別等級、経糸種別、製織・加工日、織機固有記号・製造番号、検査者が記載されて、裏面に検査者（継承会）の角印が押印されている。また、「証紙裏および畳表に角印無きもの

⁸ その他関連事業を除き、最後に掲げているは「9. 備後表のユネスコ無形文化遺産への登録推進」である。備後表継承会ウェブサイト：<https://www.bingo-igusa.com/>

は無効」と注記してある。

畳表の裏に証紙を織り込むシステムでは、製畳すると証紙の内容は見えなくなる。つまり、畳表卸業者や畳店に対する製織者の品質保証しか明示できない。このため、実証実験その2では、畳の框にも同じ内容の証紙を拡大して縫い込み、製畳現場（畳工場）で緑色の油性インクのゴム印で畳表に検印した。これにより、建築業者や施主に対しても、トレース内容を明示することができる。



図 5-3 実証実験の証紙サンプル



図 5-4 畳表への証紙織り込み



図 5-5 畳への証紙縫い込み

5-1-5 実証実験その3 蓮華寺本堂七畳

実証実験その1,2の詳細に関しては次項を参照。実証実験その3として、広島県福山市今津町の旧西国街道（近世山陽道）今津宿脇本陣である蓮華寺の本堂七畳（藁床）の表替えを計画している。2021年1月製織、2月製畳を予定していたが、社会情勢により延期した。改めて、2021年4月製織（会場：福山大学）、5月製畳・畳工事（会場：蓮華寺持仏堂）の予定である。「畳製作」の選定保存技術保存団体である文化財畳保存会（京都市）から講師を招いて、講習会と手縫い研修を実施予定である。備後表の長い歴史ある備後地域であるが、手縫いで文化財畳の修理も担える地元若手職人は育っていない。備後表と建築を繋ぐ、地元畳職人の育成も急務である。今後は、上段の間をもつ蓮華寺持仏堂4間42畳についても、順次、人材育成も兼ねて実証実験を検討している。

5-1-6 証紙の特徴と可能性

本トレーサビリティ実証実験における証紙の最大の特徴は、畳表製織の段階で施工物件を特定していることである。建築施工の最終段階を踏まえて、藁草を選び、製織するのである。一部の文化財修理を除いて、通常の流通プロセスでは、この段階で施工物件を特定することはない。建築設計・監理や建築施工管理においても、藁草や畳表、製織・製畳方法を意識することはない。さらに、多くの場合、藁草栽培・製織から畳表が畳店に納められるまでに畳表卸業者が介在するため、建築と畳表・畳の断絶はより深いものとなっている。また本証紙システムは、織機名をべ

ースとして畳表銘柄を明示することで、製織者と製織方法が特定できる。

全ての備後表の流通において、本実験の証紙システムをそのまま導入することは現実的ではないが、備後産地が一体となれば、希少な「備後藺草による備後表」だけに絞って実現可能性もある⁹。QRコードによる生産流通データベース構築と管理も考えられる。

5-1-7 今後の課題

実証実験の初期段階ではあるが、まだ少数の関係者や団体、特定の畳表銘柄だけしか検証できてない。衰退する備後表ブランドを下支えしてきた熊本県産藺草による「備後表」をどのように位置づけるかも同時に検討しなければ片手落ちである。今後は条件を変えながら、年間数回のトレーサビリティ実証実験を実施して検証を続けつつ、品質保証システムの再構築を目指したい。

5-1-8 参考文献

- 1) 佐藤圭一, 大岩智之, 河田陽依菜, 岡田紘汰他:藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明 その1~8, 日本建築学会学術講演会及び建築デザイン発表会, 2017.8-2020.9
- 2) 河田陽依菜, 佐藤圭一:備後中継表を活かした福山大学未来創造館茶室「育志菴」 同上その10, 日本建築学会大会(東海)建築デザイン発表会, 2021.9(投稿中・発表予定)
- 3) 佐藤圭一, 中嶋健明:備後中継表の織機再生と製織技術継承, 住総研 研究論文集・実践研究報告集第46号, pp.243-252, 一般財団法人住総研, 2020.3

⁹ 備後産地が一体となれば、備後藺草と備後表に関して、農林水産省の地理的表示(GI)保護制度登録の可能性も見えてくる。すでに熊本産地では、2016年に藺草と畳表がそれぞれ登録されている。

6. 備後地域発祥の中継表の技術継承と織機復元

6-1 備後中継表を活かした福山大学未来創造館茶室「育志菴」^{注10}

6-1-1 背景と目的

本項は、絶滅の危機に瀕する「備後藺草による備後表」の保全と継承を大きな目的とした「藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明」の一環でもある^{文献1)}。施主と業界、地域の協力を得て、藺草栽培から建築施工までの全プロセスにおける備後表のトレーサビリティ実証実験を行っている。備後表継承のための仕組みづくりの1つとして、新たに提示した製織証紙と加工検印を用いて畳表1枚ずつ原草地から畳工事に至るまで備後表継承会がトレースするものである。備後表の品質保証システムの再構築を目指すため畳表に証紙を織り込み、最終的には施主に対して証明書を発行して全プロセスを検証する。

備後藺草の栽培は、畳表製造卸の佐野商店（福山市芦田町）と福山大学備後地域遺産研究会（以下、研究会）、継承会の協働で、2020年11月の植え付けが5シーズン目となる。本項は、再生動力織機で製織した備後中継ぎ畳表を使用した、福山大学未来創造館茶室「育志菴」の畳工事を中心とした2つの実証実験報告である。



図 6-1 (左) 植付け (2019.12)



(右) 刈り取り (2020.7) (福山市熊野町)



図 6-2 (左) 植付け (2019.12)



(右) 刈り取り (2020.7) (福山市本郷町)

6-1-2 U 邸 LDK リノベーション三畳

(1) 建築概要

対象物件は、広島県福山市今津町の寺院に隣接する住宅である。施主家族は2019年9月の苗づくり（株分け・ポット苗挿し）から2020年7月の藺草刈り取りまで、1年を通じて積極的に関わった。

¹⁰ 本項は、以下を加筆修正して再編したものである。河田陽依菜, 佐藤圭一:備後中継表を活かした福山大学未来創造館茶室「育志菴」 藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明その10, 日本建築学会大会(東海)建築デザイン発表会, 2021.9 (投稿中・発表予定)



図 6-3 施主による苗づくり(株分け・ポット挿し)と刈り取り体験

(2) 製織と証紙織り込み

本物件は、「備後藁草による備後表」のトレーサビリティ実証実験その1」の対象である。2019年10月に再生(修理・復元・改良)した備後三蔵動力中継(三蔵中継)織機^{文献3)}を使用して、研究会の学生らが職人の指導を受けながら中継ぎ畳表を製織した。中継ぎは備後地域で継承された特殊技法である。製織作業は福山大学において、2020年9月18~19日に一般に公開して行われた。使用した藁草は、2020年7月に福山市本郷町で刈り取った4番等級のものである。藁草栽培地や収穫年、選別等級、製織・加工者、施工物件名などを詳細に記した証紙を織り込んだ。証紙織り込みシステムの詳細は、前項を参照。



図 6-4 三蔵中継織機(福山大学)



図 6-5 織り込み証紙とゴム角印

(3) 製畳(藁床手縫い)と施工(畳工事)

三蔵中継畳表を使用した、伝統的な藁床板入れ手縫い製畳は2020年9月27日に、蓮華寺(福山市今津町)持仏堂縁側で一般に公開して行われた。地域の次世代を担う畳職人であり、一級畳製作技能士の廣備畳同士の会(石井通史・木原功一郎・津山健太郎ら)によって行われた。施主には、中継表の経年変化等の調査のため、毎月1回の写真撮影に協力いただいている。製畳会場となった蓮華寺持仏堂と隣接する本堂の表替えにおいても、実証実験を予定している^{文献2)}。



図 6-6 手縫い製畳(蓮華寺持仏堂)

図 6-7 廣備同士の会の畳職人

図 6-8 LDK 畳コーナー
(2020. 9. 27)

図 6-9 半年経年変化
(2021. 4. 2)

6-1-3 福山大学未来創造館茶室「育志菴」四畳半+水屋・廊下三畳

(1) 建築概要

2020年12月に竣工した福山大学未来創造館は、歴史と未来とが「かさなり、つなぐX(crossing)」というコンセプトで計画された。茶室も含め、建築設計・監理は(株)佐藤総合計画である。4～10階が薬学部、ICTサービスなどラーニングcommonsである1～3階とカフェや会議室のある11階が全学共用エリアである。瀬戸内海を望む最上階11階の南東角にガラス張りの屋内石庭を配した四畳半茶室がある。トレーサビリティ実証実験その2として、茶室四畳半と水屋・廊下三畳に三蔵中継表を使用した。



図 6-10 未来創造館



図 6-11 11階展望フロア（中央奥が茶室入口）

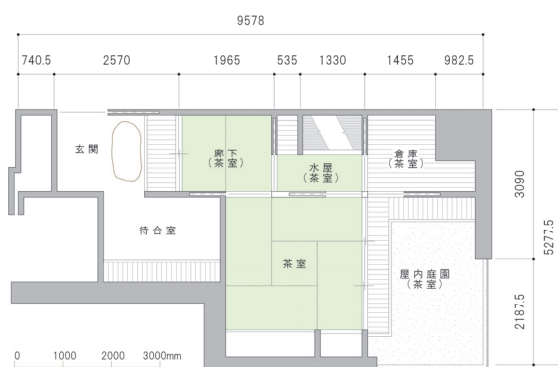


図 6-12 茶室「育志菴」平面図



図 6-13 茶室玄関

(2) 備後三蔵動力中継織機による製織

2020年10月15～18日、福山大学建築学科佐藤圭一研究室の学生を中心とする研究会メンバー（河田陽依菜、岡田紘汰ら）が、三蔵中継織機で、職人の指導を受けながら製織した。製織作業そのものは、糸の張りや製織スピードなど条件設定ができていれば、動力織機によって一定の品質が保たれる。しかし、その前段階の藺草の選り出しという作業が特に重要となり、ここで熟練職人の目利きが必要となる。手織りから機械式に変わっても、備後表が最高級品の地位を保ったのは、職人の選り出しと仕上げ（加工）時の丁寧な手作業によるところが大きい。サンプルの半畳をあわせ、4日間で8畳分を製織した。



図 6-14 藁草選り出しと三蔵中継織機による製織（福山大学）

(3) 製畳（機械縫い）

三蔵中継織機で製織した中継ぎ畳表は、2020年11月26日に広島畳材(株)の甲田工場（広島県安芸高田市）で機械製畳（藁サンド床・麻縁）した。研究会の学生らと工場に同行し、中継表裏面の髭むしり作業などをつつ、製造工程を確認し検印した。実証実験その1では製織時に証紙を織り込んだが、今回は製畳時にも証紙を縫い込んだ。



図 6-15 髭むしり



図 6-16 証紙縫い込み



図 6-17 縁縫い



図 6-18 証紙と検印

(4) 施工(畳工事)

炉畳を含む畳(藁サンド床)は、2020年11月30日に茶室に敷きこまれた。遠く瀬戸内海を望みながら、最高級品の証としての中継表の筋が透かしのように見える。中継ぎ畳表は、瑞巖寺本堂や京都迎賓館桐の間、国重文太田家住宅(福山市鞆町)などでも使われているが、文化財や個人住宅以外の半公共的な空間で体験できるのは珍しい。



図 6-19 畳敷き込み



図 6-20 框に縫い込まれた証紙



図 6-21 瀬戸内海と三蔵中継表



図 6-22 「育志菴」室礼

6-1-4 手織中継表の織機製作と製織技術継承

動力中継織機の再生に続いて、その原点となる、手織り中継ぎ織機の製作にも取り組み始めた。唯一の手織り中継ぎ技術継承者である来山淳平氏の工房(福山市沼隈町能登原)に通って指導を受け、織機製作と手織り製織の技術継承を研究会メンバーと試みている。2017年に藺草農家保管の織機を引き取り、予備的な概寸実測調査や資材調達などを行いながら、構想から4年を経て、2021年3月から本調査・製作作業を始めた。これらの製作や製織作業、展示などを十分に行える旧8号館跡地構想である福山大学「ものづくり工房」(仮称)の新設にも期待したい。



図 6-23 保存織機の移設
(2017. 9. 4)



図 6-24 資材調達(古民家解体)
(2020. 11. 4)



図 6-25 来山氏の製作指導
(2021. 3. 29)



図 6-26 土台作り
(2021. 5. 6)

6-1-5 参考文献

- 1) 佐藤圭一, 大岩智之, 河田陽依菜, 岡田紘汰他: 藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明 その1~8, 日本建築学会大会(東海)学術講演及び建築デザイン発表梗概集, 2017.8-2020.9
- 2) 佐藤圭一: 「備後藺草による備後表」のトレーサビリティ実証実験 同上その9, 日本建築学会大会(東海)学術講演会, 2021.9(投稿中・発表予定)
- 3) 佐藤圭一, 中嶋健明: 備後中継表の織機再生と製織技術継承, 住総研 研究論文集・実践研究報告集第46号, pp.243-252, 一般財団法人住総研, 2020.3

7. 鞆町を含む沼隈半島および島嶼部における地域遺産の「発掘」

7-1 備後中継表を活かした瀬戸内島嶼部・百島の商店再生^{注11}

7-1-1 背景と目的

本商店再生プロジェクトは、絶滅の危機に瀕する「備後藺草による備後表」の保全と継承を大きな目的とした「藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明」の一環でもある。主にその設計・施工プロセスに焦点をあて、備後地域で独自に継承された備後中継表を活用した。瀬戸内島嶼部の百島において商店再生を実践し、備後表流通へ直接参入し、全プロセス解明に寄与することを目的とする。備後藺草の栽培は、地元畳表製造卸の佐野商店（福山市芦田町）と福山大学備後地域遺産研究会、備後表継承会の協働で、2020年11月の植え付けが5シーズン目となる。

7-1-2 計画地

(1) 百島

計画地のある百島は、広島県尾道市南東部に位置する。少子高齢化が進み、他の島嶼部同様に過疎化が深刻な地域である。島の面積は約3km²、総人口449人（男181、女268）、高齢化率67.9%（2020年1月尾道市住民基本台帳）である。橋は架かっておらず、フェリーと高速船で尾道港や福山市の常石港などと結ばれている。島内は尾道市営の10人乗りワゴン車が巡回している。



図 7-1 百島

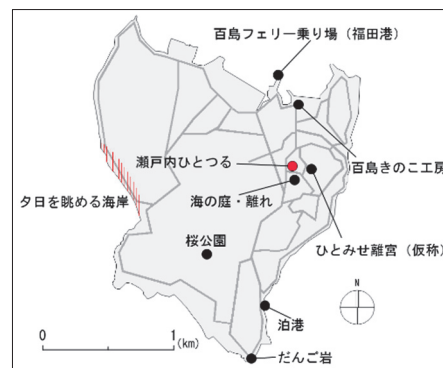


図 7-2 主なプロジェクト

(2) 「ひとみせ」から「瀬戸内ひとつる」へ

対象物件は、かつて「ひとみせ」と呼ばれ、古くから島の生活を支えてきた小さな商店を併設した木造2階建て住宅である。現在東京で会社経営する百島出身の施主の生家であり、施主の母親が引退した後は、しばらく島民らによって週2回、時間を限って開店していた。この営みを継承するためにリノベーションし、ゲストハウス（民泊）機能や地域交流の共用スペースを加えて、「瀬戸内ひとつる」となった。

¹¹ 本項は、以下を加筆修正して再編したものである。岡田紘汰，佐藤圭一，長岡正芳，大岩智之，河田陽依菜：備後中継表を活かした瀬戸内島嶼部・百島の商店再生 ―藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明― その8-1，日本建築学会大会 デザイン発表会，2020.9（採択・大会は中止）



図 7-3 リノベ前 (2018. 11. 23)



図 7-4 竣工 (2020. 1. 24)



図 7-5 ひとみせ前の路地 (交流空間) (2019. 1. 11)

7-1-3 設計・施工プロセス

(1) 設計概要

建築設計は、MNA アトリエ (兵庫県姫路市) + 福山大学建築学科 / 備後地域遺産研究会が行った。地域や施主の記憶を留めるため、躯体をほぼ残したままのリノベーションとした。可能な限り既存外壁を残して断熱材とし、外壁の仕上げはサイディングを統一色で貼った。屋根は重い瓦を撤去し、壁と同色のガルバリウムとした。現代素材での再生であるが、原形を留めた統一色の外観は集落に溶け込む。内部は状態が悪かったため、ほぼ全ての部材を取り替えた。1階には共用のLDKと大浴場・休憩室を設け、2階の和室3部屋は和・洋2室に改修した。和室8畳と休憩室6畳には、施主の要望もあり、地域伝統の備後中継表を活用した。商店と路地との繋がりを重視し、宿泊・共用スペースと一体化させて、地域交流の場として残すことを意図した。

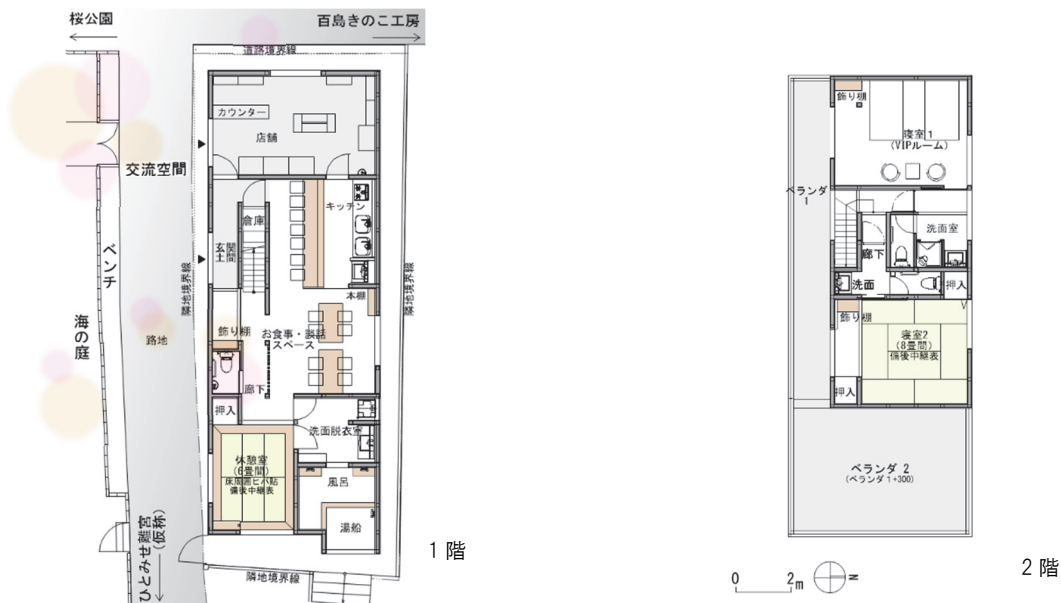


図 7-6 瀬戸内ひとつる平面図

(2) 施工（畳工事）

建築施工は、祐建装（京都府宇治市）が担当した。中継表は備後表継承会が導入支援し、2018年12月に福山市本郷町の圃場で植え付け、2019年7月に刈り取った希少な備後藺草を使用した。国宝修理などにも使われる佐野商店の「動力織中継六配表」（登録商標）に製織した。中継織りは、2本の短い藺草の穂先を繋いで織る備後地域で独自に継承された製織技法である。備後地域では数少ない、中継表の製畳経験のある高橋畳店（福山市新市町）が畳工事を行った。



図 7-7 刈り取り（2019. 7. 12）



図 7-8 畳工事 4 者現場打ち合わせ（2019. 9. 7）



図 7-9 「動力織中継六配表」



図 7-10 畳工事（2019. 11. 2）



7-1-4 企画・進行中プロジェクト

(1) 百島きのこ工房と桜公園

故郷百島に対する施主の思いは強く、少子高齢化の進んだ百島全体の将来構想を地域住民や若い学生達と共に探っている。「瀬戸内ひとつる」に先立つ事業として、2017年1月に「百島きのこ工房」を設立し、「百華 MOMOKA」というブランドで、ブラウンしめじを製造している。島の雇用機会創出など地域振興の一環である。また、瀬戸内海の絶景を望む丘に「桜公園」を構想し、数百本の桜を植樹した。



図 7-11 百島きのこ工房（2019. 8. 22）



図 7-12 桜公園で植樹（2019. 5. 12）

(2) 海の庭・離れ

百島で進行中のプロジェクトが3つある。1つ目は、瀬戸内ひとつるに隣接する「海の庭」にある離れを増築して、厨房（土間空間）を備え、住み込み可能なゲストハウスに改修するものである。2つあった和室を1つに減らして、「備後藺草による備後表」を導入する。また、藺草と同じく備後地域の伝統建材である柿渋をデッキや内外装に使用する。備後柿渋も絶滅の危機にあり、備後地域で唯一の生産工場をNPO法人ぬまくま民家を大切にする会が継承している。予算に限りもあり、デッキづくりや柿渋塗りなどは研究会によるセルフビルド的な施工を検討している。2019年10月、日本に数台しか現存しない動力中継織機を商用レベルで動態保存することに成功した文献²⁾。この再生織機を活用した製織は、継承会の技術協力を得て、研究会で実施する。



図 7-13 「海の庭・離れ」配置



図 7-14 海の庭



図 7-15 完成予想 CG

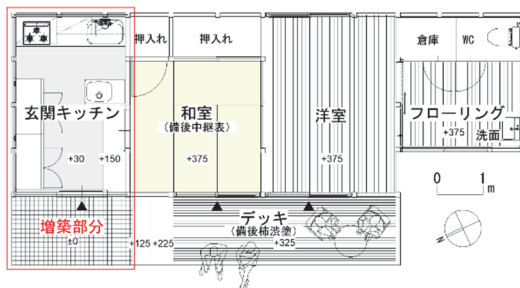


図 7-16 海の庭・離れ 平面図



図 7-17 再生中継織機(福山大)

(3) きのか工房・BBQ コーナー「海(せとうち)の縁側」

きのか工房前の瀬戸内海や福田港棧橋を眺めるスペースに、BBQ コーナー「海(せとうち)の縁側」を計画予定である。島の内外から人が集まり交流することができる縁側をコンセプトとして、海岸と平行に階段状のデッキを設けて屋根を掛け、テーブルや調理台を設置する。この木部も備後柿渋で仕上げる予定である。「海の庭・離れ」と合わせ、2022年夏のオープンを目指している。

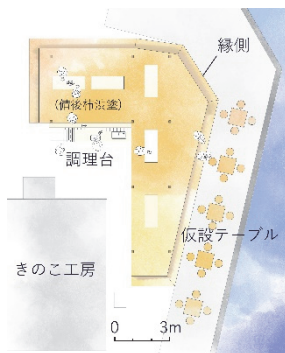


図 7-18 海(せとうち)の縁側

(4) ひとみせ離宮（仮称）

かつて施主が住んでいた住宅で、「瀬戸内ひとつる」の商店前の路地を約100m登ったところにある。中庭を囲む4棟建てで規模は大きく、現在、農機具倉庫や物置として使われている。すでに実測調査を終え、施主の意向を踏まえてリノベーション構想中である。ここでは藺草や柿渋の他、既存古材や島内外の自然素材をできるだけ活かして、〈癒+食・泊〉の空間を検討している。



図 7-19 路地から見た「離宮」



図 7-20 母屋内部



図 7-21 実測調査 (2019.11.2)

7-1-5 まとめと百島将来構想

現在、文化財や個人住宅を除いて、「備後藺草による備後中継表」に一般が触れられる建築空間はほとんどない。瀬戸内ひとつるのオープン（2020年5月オープン、2021年4月リニューアルオープン）によって、半公共的な場所で希少な備後表に身近に触れることができる。畳文化の継承にも寄与することを期待する。また将来的には、瀬戸内に沈む夕日の絶景を眺める島の西側を含め、百島全体を地域遺産の保全・継承モデルとして構想したい。

7-1-6 参考文献

- 1) 佐藤圭一, 大岩智之他: 藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明 その1~7, 日本建築学会大会(関東)学術講演梗概集, 2017.8-2020.9
- 2) 佐藤圭一, 中嶋健明: 備後中継表の織機再生と製織技術継承, 住総研 研究論文集・実践研究報告集第46号, pp.243-252, 一般財団法人住総研, 2020.3

7-2 KN 邸リノベーション計画（鞆町重伝建古民家再生プロジェクト）

鞆町において、重伝建内外で、KN 邸始め KT 邸や E 邸などいくつかの古民家再生の調査・実践プロジェクトが進行中である。KN 邸は鞆町重要伝統的建造物群保存地区にあり、江戸期に建築され歴史的建造物に指定されている。間口四間半近くの比較的大型の町屋であり、建築年代の異なる2棟の町屋を合併して1棟とされている。現状は建物の損壊が激しく改修を施さなくては住むことが出来ない状態である。9割（上限900万円）補助される福山市の「鞆の浦町家修理補助事業」によって、2018年に外観修理が行われた。2020年11月21日に平野毅氏（倉敷市・平野建築設計室）と共に現地調査、実測を行い、その後リノベーションの提案を行った。長期滞在型の宿泊施設と地域の交流の場を提案し、2階の宿泊部門は備後中継表を使用する計画とした。現在、施主らが検討中の再生補助の助成金が得られれば、実施設計に進めたい。

福山市鞆町は2016年11月に重要伝統的建造物群保存地区に選定され、多くの貴重な地域遺産がある。また同年、鞆町にある朝鮮通信使関連物件がユネスコ「世界の記憶」（記憶遺産）にも登録された。無形の文化遺産としては、鞆町は世界の至宝となった。3DCG復元や備後表を使った文化財修理などに、地域と研究会で協働して取り組んでいる。鞆町では、個別の物件の課題解決に取り組みつつ、この地域に教育研究拠点としての「福山大学鞆町サテライト」（仮称）を設立することを将来の大目標に今後の学内共同研究も推進したい。文化財は指定・登録されて終わりではなく、継承への不断の取り組みが必要であり、福山大学が地元の世界的歴史地区にサテライト・キャンパスを構えることの意義は大きい。潤沢な予算のある一部の国宝級文化財を除けば、民間や地方行政の手に委ねられた有形文化財は日々の劣化が激しく、地元の研究機関が継続してその保全の一端を担うことは必要不可欠と考える。こうした劣化しつつある貴重な建築遺産（S店倉庫など）を、利益追求しない大学が継続利用することは文化財保全の有効な手段の一つである。鞆町にある地域遺産の保全は喫緊の課題である。



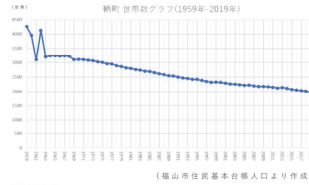
図7-22 鞆町KN邸リノベーション 初期計画案（担当：河田陽依菜）

1. 鞆の浦 現状

鞆の浦には様々な魅力があります。

「鞆公園」として保護された大小の島々、雁木、常夜燈、波止などの港の景勝、鞆町重要伝統的建造物群保存地区に選定された歴史ある町並み、親切で温かい人々。しかし歴史的な場所であるからこその問題も抱えています。観光客の増加の影響による交通渋滞高齢化の進行。大きな問題は地域外からの人の流入がなく若い世代の地域外への流出が進行し世帯数が減少し続けていることがあげられます。

鞆の浦の良さを生かし地域外の人に移住したいと思ふような町にするにはどのような場所が必要でしょうか。



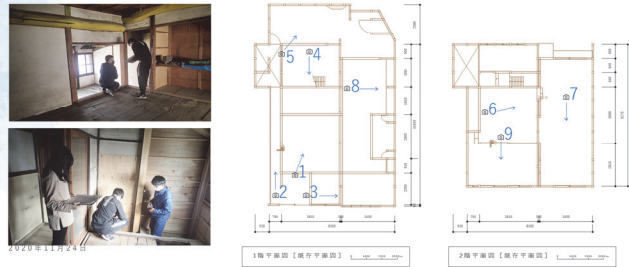
参考資料:福山市建設局都市部都市計画課,鞆まちづくりビジョン,福山市,2018.6



2. 鞆町重伝建 歴史的建造物 衣笠邸 現状



衣笠邸は鞆町重要伝統的建造物群保存地区にあり、江戸期に建築され歴史的建造物に指定されています。間口四間半近くの比較的大型の町屋であり、建築年代の異なる2棟(江戸～明治)町屋を合併して1棟とされています。現状は建物内部が損壊し、改修を施さなくては住むことが出来ない状態です。2018年鞆の浦町屋修理補助事業によって外観復元修理を行いました。私たちの研究室では2020年11月24日に古民家再生のエキスパートである平野毅氏(倉敷市,平野建築設計室)と共に現地調査を行い、実測しました。

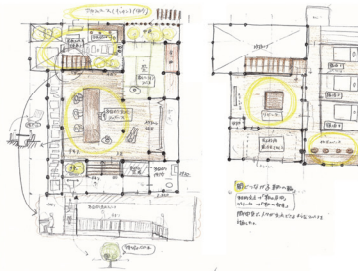


参考資料・図引用:福山市教育委員会,福山市鞆町伝統的建造物群保存対策調査報告書,福山市,2017.5



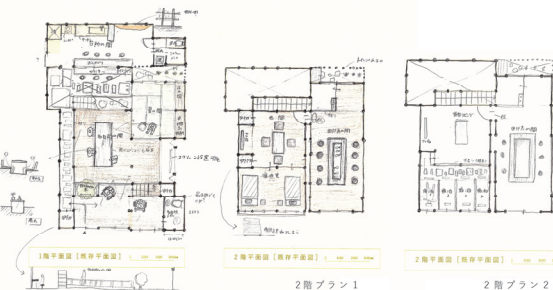
3. 設計プロセス

第1案 (2020年11月9日)



コンセプトの決定
「間(はざま)」のコンセプトを決定し部屋の配置を決めました。宿泊部門はカプセルホテルのようなイメージで数人が泊まれるように計画しました。しかし、この計画では2階の明治棟の小屋組みを生かせないと考え再検討しました。

第2案 (2020年11月22日)



平面の検討

小屋組みを生かせるプランとして、2階のプランをふたつ計画しました。以前の計画に加えシャワーブースや台所等も計画に取り入れました。プラン1は1組のみが宿泊できるようにし、プラン2は以前と同様にカプセルホテルのようなプランとしました。この案をもとに平野毅氏と現地調査時に検討し、最終提案をしました。

3

4. 対象者

「鞆の浦の人々 + 地域外の人々」

建物内に地域の人々が気軽に利用することができ、小さな講演会や個人の趣味の教室を開いたり、作品などを展示したりすることもできる交流の場を計画します。加えて、地域外の人が長期間宿泊することができる場所を計画し、鞆の浦で生活しながら地域の人々ともより深く交流できるような場所を目指します。



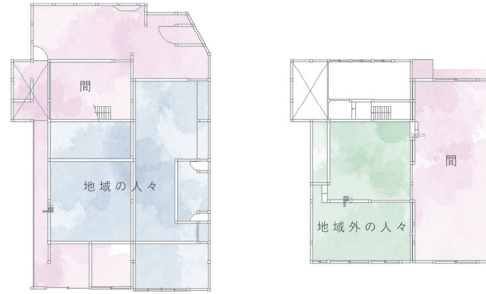
地域の人々が
交流する
多目的に
利用できる場所

地域外の人々が
長期的に宿泊する場所

間

ふたつを繋ぐことが
出来るような場所を計画します

5. ゾーニング



- 地域の人々 … 気軽に立ち寄ることができる一階に計画し、車いすの方でも利用できるようにします。地域外の人でも利用することができます。
- 間 … 地域の人が利用する場所と地域外の人が利用する場所の間に計画をします。
- 地域外の人々 宿泊部門 … 2階に計画し、町の様子を眺めながら暮らすことができます。

5. 「ともに暮らす」 地域外の人々がどのようにこの場所で生活するか、いくつかのパターンをご紹介します。



例1
鞆の浦で自分の
作品の
展示会を開催したい人

1. 宿泊部門に長期間宿泊
2. 1階を使用する町の人と仲良くなる
3. 展示会を開き地域の人を招待する。



例2
福山市に長期滞在する
用事があり鞆を選んだ人

1. 1階では地域イベントを開催したり地域ひとが談話している。
2. 自然と鞆町の様子について知る。



例3
鞆の浦で
研究をしたい
福山大学生

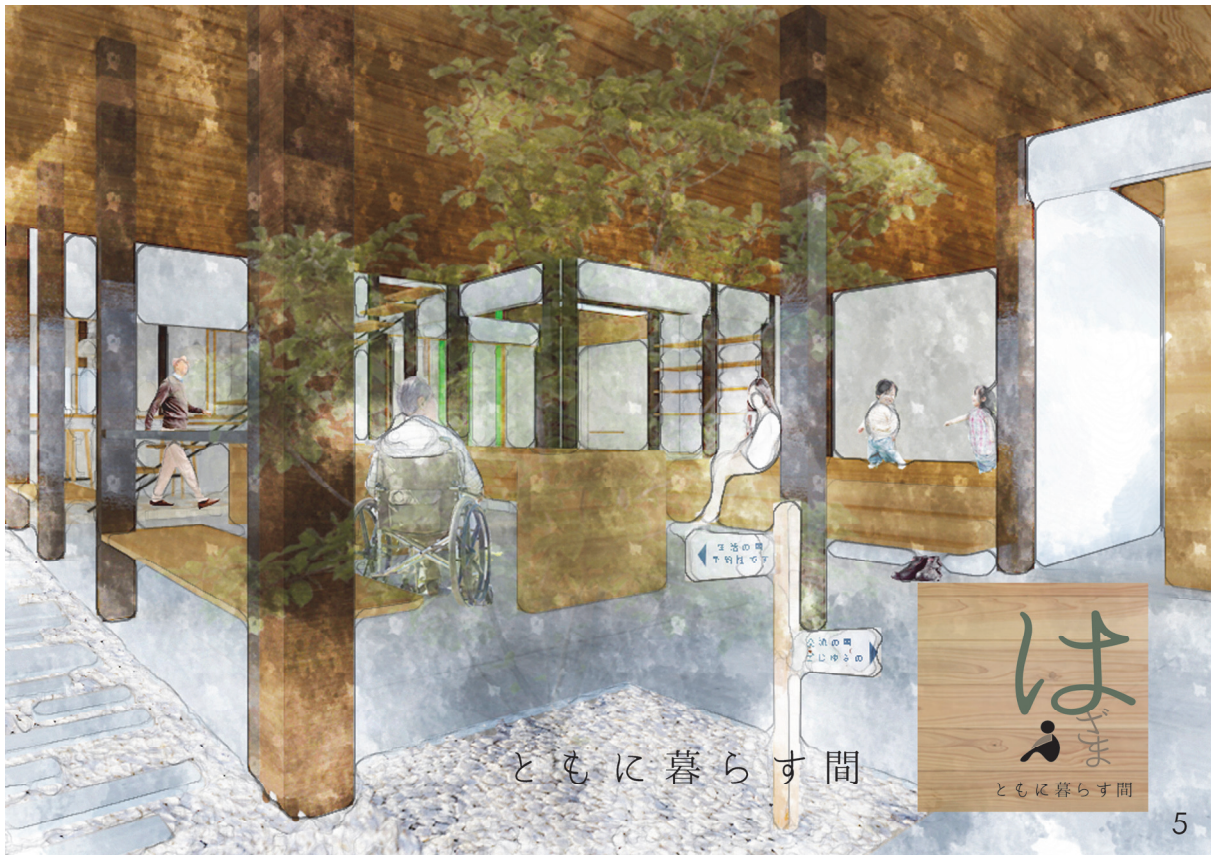
1. 2階を調査の本拠地とする。
2. 2階に集まってくる人と話し鞆の浦のことを深く知る。



例4
鞆の浦に移住を
考えている人

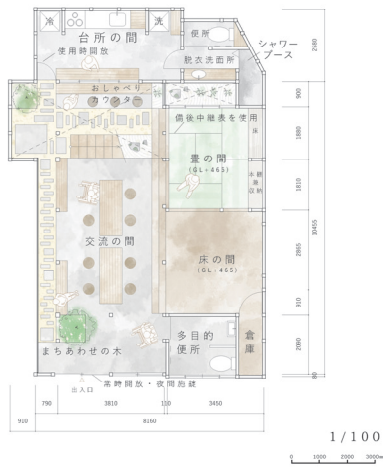
1. 計画施設の2階でお試して生活
2. 鞆の浦の人々と交流し町の雰囲気を知ってもらう

4



5

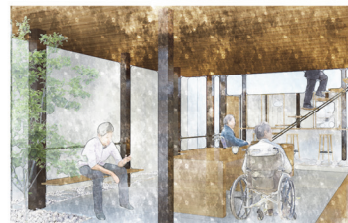
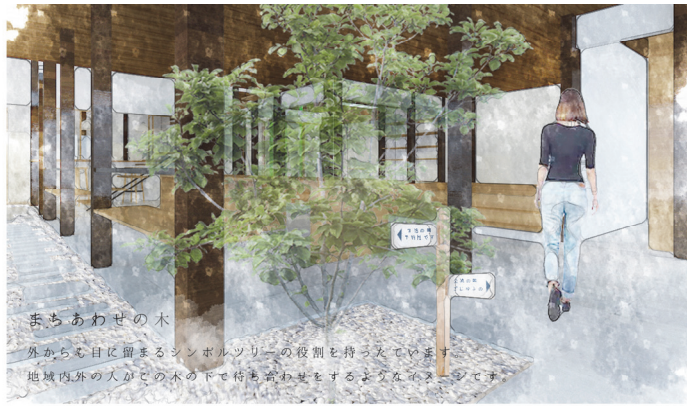
軒の浦の人々が集う場所



1階 計画内容

日中は扉を開け放ち、地域の人々が誰でも気軽に利用できるような場所とします。畳の間・床の間以外は下足で利用することができ、車いすを使用される方でも気軽に立ち寄ることが出来る場所となっています。壁がなく開放的な空間のため様々な目的に使用することができます。

6



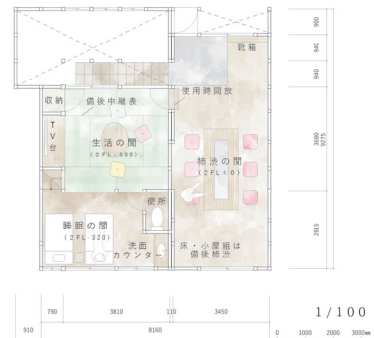
おしゃべりカウンターは軽い料理をもてなす際や軽くおしゃべりする際に利用でき、吹き抜けの開放的な空間です。畳の間、床の間はほかの床レベルより一段上がっているため、講演会やイベントなどを開くこともでき、また、車いすの方と同じ視線になります。



2階 計画内容

ともに暮らす場所。

柿波の間と宿泊部門の上部は、小屋組みを見せることで開放的な空間であり、また歴史を感じることが出来ます。生活の間で長期に滞在し、町の人と様々な形で交流できるようになっています。



5. 地域の素材—備後蘭草と中継畳表・備後柿波

備後地域には備後柿波や備後表などの優れた天然素材が数多く存在していました。柿波は防水、防腐効果があり古くから様々な生活の場に用いられてきました。備後は、日本三大柿波の山城(京都)、美濃(岐阜)と並ぶ柿波産地の一つとされていました。現在柿波工場は、尾道市浦崎町に唯一存在しています。備後表もかつて最高級畳表として有名でしたが、現在蘭草を栽培しているのはわずか数軒のみです。このような優れた地域産品を地域外の人々にも知ってもらい、実感できるような空間となっています。

備後柿波：NPO法人ぬまくま民家を大切にする会
備後蘭草と中継表：(有)佐野商店・備後表織造



7



ともに暮らす間

8. 福山市西部地域における地域遺産の「発掘」と地域デザイン

8-1 本郷島と長和島を中心とした松永塩田跡の変容(1962～2020年) ^{注12}

8-1-1 序論

(1) 研究の背景

松永は塩の町として栄え、初めての塩田は1667(寛文7)年に完成し、その後多くの塩田が造られた。かつて塩田が広がっていたJR松永駅南方には現在、住宅や商店が建ち並んでいる。約300年前、本庄重政(1606～1676年)が「袋の海」と呼ばれていた松永湾を埋め立てて塩田を造成しようとしたときは、遠浅の海であった。

1960(昭和35)年に松永塩田は廃止され、次々と埋め立てられた^{文献1)}。現在では土地の記憶が消え、人々から忘れられている。塩田跡は、下駄工場やその他の工場用地などに利用された^{文献2)}。他の地域同様、農地にすることも試みたが塩田跡地では塩分が抜けず、農地転用はできなかった。

(2) 研究の目的

本研究は、現在の松永地区(旧松永市域)の中心地である松永塩田跡に着目し、塩田廃止の1960年以降現在に至るまで、松永塩田跡が如何に変容したかを明らかにすることを目的とする。

(3) 既往研究

田上^{文献1)}は、塩田が廃止されてから9年後の1969年では約37%の塩田跡地が整備され、1977年では約50%、1987年では約70%が整備されていることを土地の面積計算から明らかにしている。しかし、その後現在に至るまでの塩田跡の変容を明らかにしたものはない。

(4) 研究の方法

調査対象地域は、JR山陽本線松永駅南方の松永塩田跡である。松永塩田7島のうち、本郷島と長和島に焦点をあて、各建築を写真撮影し、階数、構造、用途を調査し、現状を把握する。次に塩田廃止直後の1962年以降20年毎の住宅地図^{文献13)}を用いて松永塩田跡が如何に変容したのかを建築レベルで分析する。

8-1-2 松永の塩田

(1) 塩田の成立以前

日本は周囲を海に囲われた島で、岩塩も存在せず、また温帯の中では最多雨地域であるため、天日結晶塩を採取することが不可能である。そのため、塩の原料は海水に依存してきた。塩を製造する第1段階として、海水から何らかの方法によって水分を除去して濃度の濃い海水を採取すること、そして第2段階としては濃度の濃い海水を煮詰めて水分を除去して塩の結晶を作る。第1段階の事を採鹹(さいかん)過程、採取した濃い海水の事を鹹水(かんすい)という。この鹹水を原料にして、塩を製造する第2段階の事を煎熬(せんごう)工程という^{文献2)}。「令和元年度塩需給実績」によると、日本は年間709.4万tの塩を輸入し、国内産は90.3万tであり、合わせて799.7万tの供給量がある。その内、生活用が13.5万t、業務用が152.4万t、ソーダ工業用が615.5万tであり需給量(消費量)は781.5万tである。需給合計の誤差は在庫量等である。

¹² 本項は、以下を加筆修正して再編したものである。井上誠一郎：本郷島と長和島を中心とした松永塩田跡の変容(1962～2020年)、2020年度福山大学建築学科卒業論文、2021.1

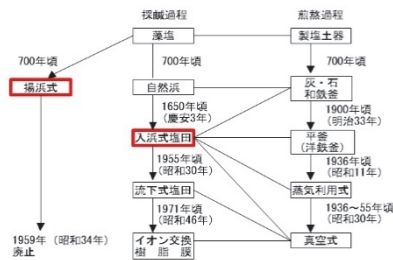


図 8-1 製塩技術の発達(出典：文献[2]より作成)

(2) 松永塩田の廃止・転用

1891(明治 24)年の国鉄開通以来、松永駅は下駄産業を支えてきた。駅南側には旧松永高校や下駄工場が広がっていた。工場の北側には棟を連ねた下駄職人長屋が並び、南側には広い材木乾燥場もあった。江戸時代から行われてきた入浜式塩田の姿も見られるが、1960(昭和 35)年、その歴史に幕を閉じた。



図 8-2 1951(昭和 26)年頃の松永駅周辺(出典：はきもの資料館所蔵資料より作成)

8-1-3 塩田の方式

(1) 揚浜式塩田

揚浜式塩田は海面より高い位置に造られ、地盤は粘土で打ち堅め、海水が漏洩しないようにしてある。この地盤面に細砂を撒き、これに汲み上げた海水を撒布して蒸発させ、十分塩田を付着したときにこの砂を集めて、沼井に集約し、海水を掛け塩分を浸出して、鹹水を採取する方法である(文献7)。

(2) 入浜式塩田

松永塩田は、主に入浜式塩田として発展した。入浜式塩田を築くには、潮の干満が大きく南向きの地を見定めて、沖に外提を造る。莫大な経費を使用する事業になるが、川に沿った石垣を築き、通航の便のために程よく溝を掘り、溝の上に土手を築いて、「沼井」を築く(文献7)。

日本の代表的な在来製塩法である入浜式塩田は、近世初頭播州赤穂で始まり、瀬戸内海一体に普及した。いわゆる十州塩田を形成し、全国塩生産の 8 割をここで生産した。入浜式塩田は、中国、朝鮮、および日本にあった塩浜法をベースとして、その上に開発され発達した日本独特の技術である。19 世紀初めにおいて、1.4~2.1ha の塩田と石釜 1 基によって、1 つの作業、経営単位である「1 塩戸または 1 軒前」を構成し、5~10 人の専門労働者がこれを操業した(文献9)。

入浜式塩田は、揚浜式のような人力によることなく、海水を通門によって調整し、意のままに、海水の出し入れを行なうものである。1 枚当たりの塩田面積は極めて広くなり、経営も大規模かつ専業として行われるようになった(文献4)。



図 8-3 1955 (昭和 30) 年頃の松永塩田 (徳島)
(出典: 文献 [10])

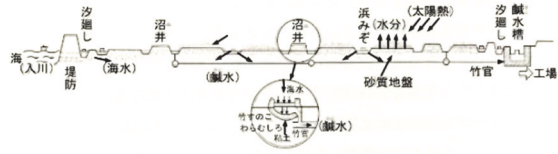


図 8-4 入浜式塩田の構造
(出典: 文献 [2])

(3) 流下式塩田

流下式塩田は、流下盤と枝条架で構成される。在来の入浜式塩田は、大量の砂を移動させるために多くの労力を要し重労働である^{文献 9)}。これに対して流下式塩田は、流下盤にしても枝条架にしても、海水や鹹水が流下する間に蒸発が進行する。海水や鹹水の操作はすべてポンプで行われるので、人は塩田の管理だけであり、人手も少なく軽作業でよい^{文献 9)}。

8-1-4 本郷島と長和島

(1) 松永塩田 7 島

本庄重政を中心とする松永塩田の新開事業は、1660 (万暦 3) 年に始まり、1667 (寛文 7) 年に完成した。その時新開 7 島 (本郷島、今津島、長和島、徳島、西島 (稻荷島)、神島、小代島 (機織島)) を築き、そこに合計 48 の塩田を作ったといわれている^{文献 1)}。これとは別に柳津地区にも 1766 年から 1783 年にかけて 4 島 (相生島、野島、安永浜、慶応浜) が開発された。

1937 (昭和 12) 年には、瀬戸内海屈指の製塩地域となった。コストの引き下げをねらってまもなく枝条架式への転換がおこなわれ、1960 年 1 月長い塩田の歴史を閉じることになった^{文献 6)}。

図 8-5 は備陽六郡志の著者・宮原直愷が自ら描いたもので、完成後初期の松永塩田の状況が分かる貴重な絵図である。正確な測量地図ではないが、当時のおよその塩田の位置関係と名称を把握することができる。塩田水路や羽原川、松永湾などが描かれている。

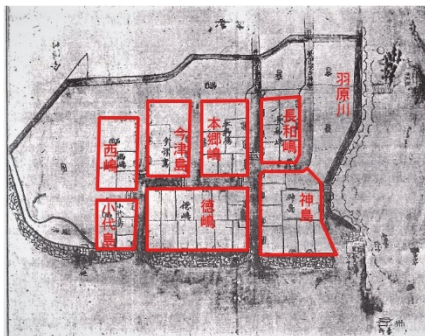


図 8-5 松永塩田の古絵図 (出典: 文献 [1], [12] より作成)

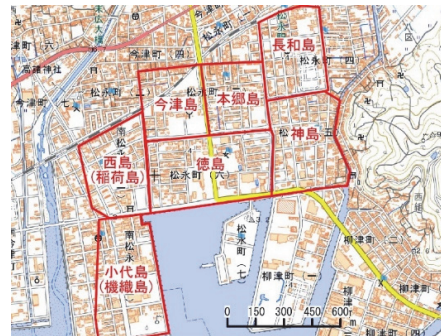


図 8-6 松永塩田跡 2020 年 (出典: 国土地理院電子地図より作成)

(2) 調査範囲

本研究は、7 島のうち変化が激しいと思われる、JR 松永駅近接の本郷島と長和島を対象とした。両地区の悉皆調査結果と入手可能な 1962 年以降の住宅地図^{文献 13)}を分析対象とした。

(3) 現在の本郷島

2020年8月31日に本郷島の悉皆調査を行った。地区全体に2階建ての木造戸建住宅が多い。駅に近い東側には、非木造の集合住宅や大型ビル、事業所などが多い。

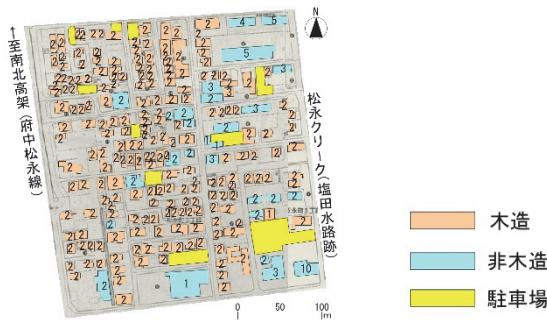


図 8-7 階数・構造 本郷島 2020年 縮尺 1/8000



図 8-8 2020年8月31日撮影

(4) 1962年から2020年までの本郷島の変容

1962年、1980年、2000年、2020年の住宅地図^{文献13)}を分析対象とし、塩田、空き地、駐車場、工場、住宅、事業所、店舗、公共的施設の8つの用途に分類した。

(1) 1962年

廃止直後の1962年は埋め立てがまだ進んでおらず多くの塩田がそのまま残っている。西側には事業所、工場が建ち並んでいる。

(2) 1980年

塩田が廃止されてから約20年を経て1980年は、住宅や工場が建て詰まっている。塩田跡は、土地が整備分割されて工場や住宅が多くなり埋め立てが進んでいる。地区南側の塩田跡は空き地化している。

(3) 2000年

1980年に比べ工場が減り、住宅が増え始めている。かつての塩田であった空き地が減り、住宅や駐車場へと変化しているが、依然として空き地が多く残る。

(4) 2020年

2000年と比べると空き地がなくなり、敷地が細分化されて住宅が建て詰まっている。この間に本郷島は急激に変化した。

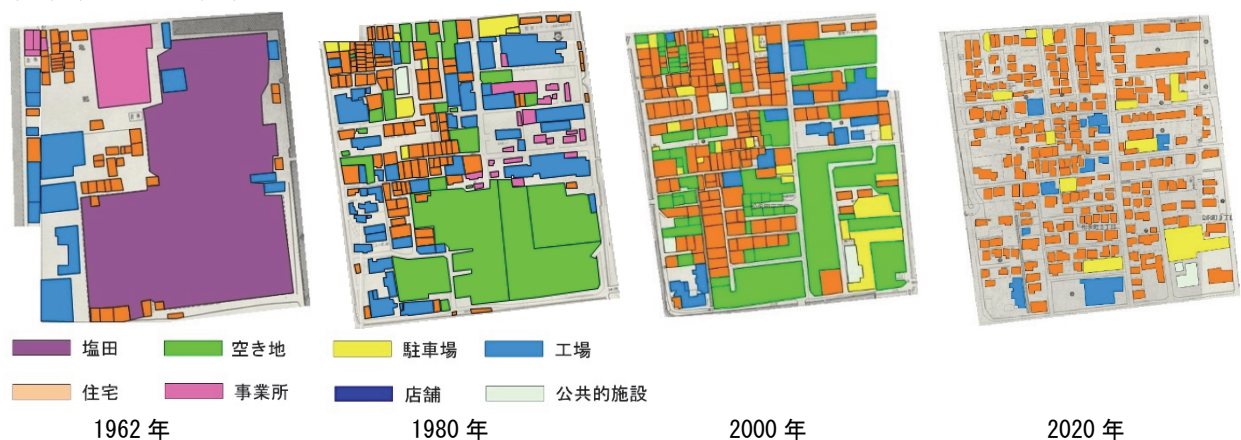


図 8-9 1962~2020年の本郷島 縮尺 1/8000

(5) 現在の長和島

2020年9月18日と10月31日に長和島の悉皆調査を行った。駅前地区ということもあり駐車場が多く、大型ビルやホテル、飲食店や事業所などが増え、木造の戸建住宅は少ない。

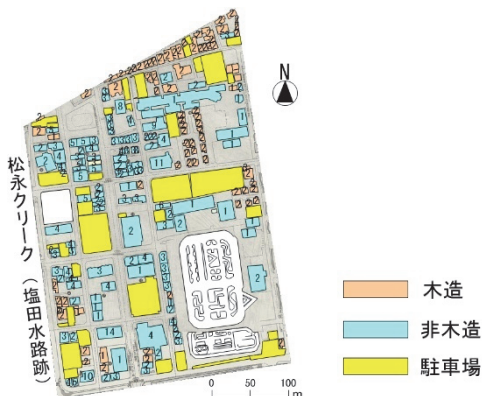


図 8-10 2020年の長和島 階数・構造 縮尺 1/8000



図 8-11 2020年10月31日撮影

(6) 1962年から2020年までの長和島の変容

(1) 1962年

廃止直後の1962年の長和島はほとんどが塩田で、塩田以外もほとんどが空き地であった。地区北東にマルヤマ商店の下駄職人長屋が残る。住宅は駅前に集中しているだけで、南側には少ない。

(2) 1980年

塩田廃止後約20年が経ち、すでに塩田の痕跡はない。大型駐車場が整備され、自動車学校も開校している。北東部に1978年に旧マルヤマ商店事務所が日本はきもの博物館として整備された。他にも図書館、郵便局、テニスコート、公園などがある。

(3) 2000年

駅前が敷地整備され、大型駐車場も増えている。1994年に日本はきもの博物館・日本玩具博物館の新館が建っている。

(4) 2020年

空き地も完全になくなり、住宅、オフィスビル、集合住宅やホテルなどの建築物が多くを占めるようになる。駅前地区ということもあり飲食店が増えた。

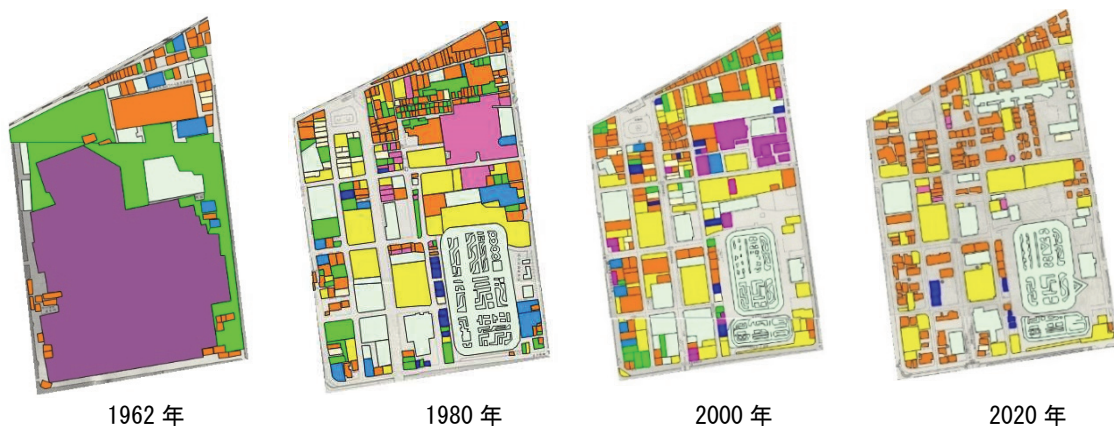


図 8-12 1962～2020年の長和島 縮尺 1/8000

8-1-5 考察と結論

塩田廃止直後の1962年には、本郷島も長和島も同様に塩田がほとんどを占めていた。しかし、1980年に長和島の塩田跡が急激に市街化される一方で、本郷島は空き地化するとどまっている。長和島においては、1969年の自動車学校開校や1978年の日本はきもの博物館開館などがこの間の地区の変化に大きな影響を与えた。

2000年時点でも、本郷島は未だ空き地が多く残っている。また、両地区の松永クリーク（塩田水路跡）による隔たりも、隣接する本郷島と長和島の性格の違いを大きくしている。塩田跡という両地区の立地条件が、それぞれの発展段階に影響を与えている。両地区の松永駅に対する立地の違いも大きいと思われる。

本郷島が大きく変容するのは2000～2020年の間である。地区西側に幹線である府中松永線の高架が整備されたことが大きい。この高架道路工事に伴う宅地整備によって、地区全体の宅地化が進んだと考えられる。

今回、松永塩田7島の内、本郷島と長和島の調査を行ったが、残りの5島や柳津地区の塩田跡も調査することで、松永塩田跡全体の変容を把握することができる。また、20年毎の分析を行ったが、5～10年毎に精査することで松永塩田跡の変容をより詳細に明らかにすることができる。過去の地区変容プロセスの詳細調査を進めることで歴史的展望を得ることができ、福山市西部地域の中核としての松永地区の今後の再生に寄与できる。

8-1-6 参考文献

- 1) 田上敦紀：松永塩田跡地における土地利用変化に関する研究，福山大学建築学科卒業論文，1990
- 2) 重見之雄：瀬戸内塩田の経済地理学的研究，大明堂，1984
- 3) 村上正名編：岸辺のいとなみ-松永湾をめぐる産業史-下駄100年，1978
- 4) 広島県教育委員会：塩の民俗資料緊急調査報告書，広島県文化財協会，1974
- 5) 相良英輔：近代瀬戸内塩業史研究，清文堂出版，1992
- 6) 村上誠：松永塩田，瀬戸内塩田の変貌，2巻 p.46，1962
- 7) 児玉洋一：近世塩田の成立，日本学術振興会，1960
- 8) 石井亮吉：松永塩業史文化史の研究，文化社，1973
- 9) 永原慶二，山口啓二編：講座・日本技術の社会史-第二巻-塩業・漁業，日本評論社，1985
- 10) 平井隆夫：福山・府中今昔写真帖，郷土出版社，2004
- 11) 河合正治：瀬戸内海地域の宗教と文化，雄山閣出，1971
- 12) 芸備郷土誌刊行会：備後叢書（1），中国文化財保存顕彰会，1979
- 13) ゼンリン住宅地図 1962,1980,2000,2020（各年版）

8-2 備後柿渋の製造工程に関する調査研究^{注13}

8-2-1 序論

(1) 背景

柿渋は、日本古来より存在する良質の天然素材である。特に備後地域は、岐阜・美濃と京都・山城と並び日本三大柿渋産地の一つとされている。最も歴史が古く、質も最上とされているが、製造工場は1つしか現存しない。柿渋には防水、防腐効果があり、古くから船や船具に使用されてきた。備後地域にかつて存在した村上水軍、瀬戸内海での漁業が、備後の柿渋文化の繁栄に大きく関係している^{文献1)}。

近年の住環境の価値観ではクリーンなイメージは、プラスの付加価値として作用する^{文献2)}。柿渋の色は本来彩度の低いこげ茶だが、媒染材を用いることで木造内装としてニーズのあるオーク色やウォルナット色に近い色にまで彩度を上げることができる。

また木材の腐食防止作用があり、下地となった木材は辺材、芯材どちらにも同等の木材保護効果を発揮し、歴史的建造物を何百年と欠損や腐朽から守ってきた^{文献3)4)}。現代建築の実用的な仕上材としても一考すべき価値がある。

(2) 目的

本研究は、備後地域に唯一現存する柿渋工場を対象として、柿渋破碎・搾汁機械の概寸図面を記録すると共に、柿渋の製造工程を明らかにし、備後柿渋の継承のための知見と指針を得ることを目的とする。



図 8-13 柿渋工場・柿畑・柿渋倉庫

(3) 既往研究

柿渋全般を網羅的に扱っている文献[1]には、柿渋製造の歴史や備後地域でなぜ柿渋製造が盛んだったかについて述べられている。かつて村上水軍の船具に柿渋が多く使用されており、防水効果を期待して使用されていたことが明らかにされている。

住環境における柿渋の仕上げ着色に関する文献[2]では、柿渋着色の色の幅に関するもので、柿渋に媒染剤を加えることによって色を変化させることが可能であることが明らかにされている。渋柿の長期間の耐候性に関する文献[3]では、自然由来の塗料であっても、木材に対し長期に渡る欠損と腐朽に対する木材保護効果を発揮することを検証している。文献[3]の類似研究として文献[4]では、柿渋は腐食に強いが、雨水による溶脱を防ぐため野外での使用には定着処理が必要であると指摘されている。しかし、いずれも備後柿渋の機械製造工程に関する考察はほとんどない。

¹³ 本項は、以下を加筆修正して再編したものである。佐藤貴行：備後柿渋の製造工程に関する調査研究, 2020年度福山大学建築学科卒業論文, 2021.1

(4) 研究方法

柿渋工場の実測調査とスタッフへの聞き取り、柿渋製造工程に対する参与観察を行う。また、柿渋の熟成経過観察と木材への簡易塗装試験も行う。

8-2-2 柿渋の歴史と製造・染色

塗料は素材の表面に被膜を作って素材の色を変化させるものをいい、染料は繊維に色素を染み込ませるものを指す^{文献5)}。柿渋による発色(着色)は、カキタンニンの酸化変色による化学反応によって起こるものであり、厳密には染色とも塗装ともその仕組みは異なる^{文献6)}。

他の天然染料と異なり、大気に触れ、酸化反応によって発色するため、紫外線に触れても酸化し続け、色褪せることはなく、経年でむしろ色は濃くなる。乾燥すると硬化する性質があり、それが撥水効果をもたらし、船具などに使用されてきた。柿渋の被膜にはタンパク質に反応し分解する作用があり、微生物を殺菌し防腐効果をもたらす^{文献6)}。

8-2-3 現地調査

(1) 予備調査(2019年9月1日)

浦崎町で渋ガキ収穫から搾汁まで一連の作業を体験し、2020年シーズンの本調査準備を行った。



図 8-14 収穫体験



図 8-15 工場長による説明

(2) 本調査事前打ち合わせ(2020年8月5日)

前年9月の予備調査以来の現地本調査であり、工場スタッフと打ち合わせを行った。当日は収穫作業等は行わず、今シーズンの搾汁作業開始のために工場内と機械の清掃・メンテナンスを行った。高圧洗浄機を使用し、ローラー部分やコンベア部分、有隙桶についた渋ガキの破片を飛ばした。柿渋工場の清掃後、柿渋倉庫(福山市沼隈町)へ向かった。柿渋倉庫には5tタンクが5つ並び、大量の柿渋を貯蔵し、熟成できる。

工場スタッフが運営する備後尾道柿渋商店(福山市沼隈町)にて、実際の商品の容器詰め、商品化予定の柿渋を使用した米袋などの実態調査を行った。柿渋の米袋については、塗装方法を試行錯誤し、開発中である。柿渋には防腐効果があるので、腐りにくく丈夫な素材となる。商品化する柿渋は搾汁から2~3年の熟成期間を経ているもので、茶褐色から黒褐色に変色している。また、「ぬまくま道の駅」(福山市沼隈町)などにおいて特産品として販売されている。



図 8-16 機械清掃



図 8-17 ボトル詰め

(3) 渋ガキ収穫 1 日目 (2020 年 8 月 17 日)

浦崎町住吉神社近くの柿畑にて、高枝切り鉋などを用いて柿渋の原料となる渋ガキを収穫した。機械を動かすために最低必要な渋ガキの量はコンテナ 10 箱、合計約 200kg である。猛暑のため 2 日に分け、早朝 7:00~10:00 のみの作業で、1 日目の収穫は 4 人で 4 箱であった。



図 8-18 収穫作業 1



図 8-19 収穫した渋ガキ 1

(4) 渋ガキ収穫 2 日目 (2020 年 8 月 18 日)

収穫作業の 2 日目は、6 人で計 10 箱分の渋ガキを収穫した。収穫量は 2 日間で合計 10 箱(1 箱約 20kg)となり、機械を動かすために最低限必要な 200kg を確保できた。渋ガキは、収穫後すぐに腐りはじめるので、数日以内(できれば即日)に搾汁する必要がある。



図 8-20 収穫作業 2



図 8-21 2 日間で 10 箱

(5) 柿渋製造 (2020 年 8 月 19 日)

収穫した渋ガキを柿渋工場(尾道市浦崎町)へ運び、破碎・圧搾作業を行った。渋ガキの重量を箱ごとに計測し、重量を記録した。10 箱の合計は 239kg であった。まず機械の挿入口に渋ガキを入れる。手作業で破碎機上部へ向かうエスカレーター式の機械に流すが、大量に入れると機械が詰まるため、少しずつ流す。破碎機の 3 段階のローラーによって細かく砕かれた渋ガキはコンベアによって有隙桶に入れられる。砕いた渋ガキに、渋ガキ総重量の 10%の水を加えてほぐし、圧搾する。桶は有隙桶であり、柿渋が排出され、パイプを通過して貯蔵桶に貯まるようになっている。この時できたものを 1 番渋という。1 番渋の搾汁後、搾りかすをほぐして水を加え、再び搾汁する。これを 2 番渋という。約 200kg の渋ガキから約 200ℓ の柿渋ができる。1 番渋は 7.0Bh(ボーマ)、2 番渋は 2.2Bh であった。重ボーマ度は純水を 0Bh とし、15%食塩水を 15Bh としてこの間を 15 等分した比重の単位である。数値が大きいくほど比重も大きい。



図 8-22 コンベア



図 8-23 破碎ローラー

(6) 尾道市御調町の渋ガキ(2020年8月24日)

尾道市御調町の柿畑から届いた約400kgの渋ガキの搾汁作業の調査を行った。御調町からの輸送中に傷んだものを選別して搾汁を開始した。御調町柿渋は浦崎町のものより青みが強く、比重は7.4Bhであった。その際、前回の調査(2020年8月19日)で搾汁した浦崎町柿渋の比重を再計測すると、搾汁後5日目となるが、4.6Bh(1番渋)、1.1Bh(2番渋)に下がっていた。



図 8-24 傷んだ渋ガキ



図 8-25 破碎後の有隙桶

(7) 因島の渋ガキ(2020年9月9日)

因島からの渋ガキの破碎搾汁を調査した。因島からの渋ガキも保管中や輸送中に傷んだものを取り除き、搾汁を開始する。到着時には機械が不調で、砕いた渋柿を運ぶコンベア部分が故障していたため、応急処置を施して搾汁した。搾汁後、沼隈町の柿渋倉庫に、柿渋400ℓを運んだ。



図 8-26 破損部分



図 8-27 搾りカス集め

(8) 実測・聞き取り調査(2020年11月29日)

浦崎柿渋工場において柿渋圧搾・破碎機械の寸法実測と聞き取りの追加調査を行った。また工場長(檀上安弘氏)とスタッフへの聞き取りを行った。浦崎柿渋工場では例年約5tの柿渋を生産し出荷している。毎年、因島と尾道市から渋ガキを仕入れているが、2020年シーズンは猛暑や感染症などが原因で、主要な原材料生産地である因島からの渋ガキの量が減り、約2tしか生産できなかった。聞き取り時点で、木材への柿渋塗装試験を検討していた。木材への柿渋の2度塗りの塗装は、1度塗り乾燥直後に塗装しても問題ないと教示された。



図 8-28 工場長への聞き取り



図 8-29 実測作業

8-2-4 柿渋圧搾・搾汁機械の実測と記録

(1) 模式図と有隙桶

「NPO 法人ぬまくま民家を大切にする会」が浦崎町に保有する柿渋機械の実測調査を行った。稼働するためには最低でも渋ガキ 200kg 以上が必要である。破碎機上部から投入された渋ガキは、3 種類のローラーに砕かれてコンベアで有隙桶に入れられる。有隙桶の隙間から出た柿渋は、パイプを通して、床下の貯蔵桶に貯まる。

図 3,4 は、2020 年 9 月 9 日に解体修理を行った有隙桶内壁の構造である。独特であり、重要かつ傷みやすい鉄板部分には細長い穴が開いており、搾汁された渋柿がその穴を通し、木材の隙間を通して貯蔵桶に送られる。

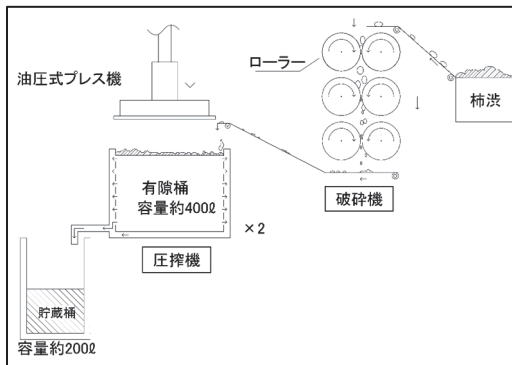


図 8-30 柿渋圧搾・搾汁機械 模式図

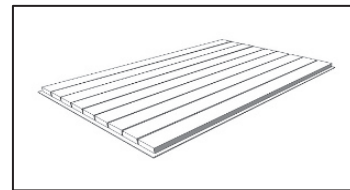


図 8-31 有隙桶 内壁

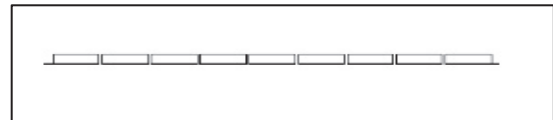


図 8-32 有隙桶 断面図



図 8-33 朽ちた有隙桶内壁



図 8-34 修理作業

(2) 平面図

柿渋圧・破碎搾機械の渋ガキ挿入口は幅 920mm、奥行き 1,320mm、深さ 260mm である。有隙桶 1 つの幅は 660mm、奥行き 1,240mm 深さ 1,045mm であり、2 つ合わせて約 400kg の砕かれた渋ガキが入る。

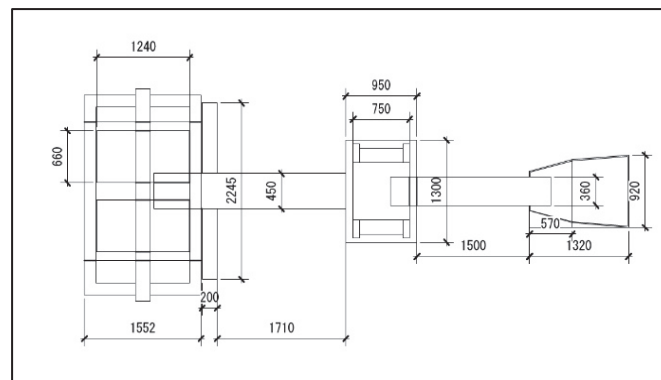


図 8-35 平面図

(3) 立面図

機械高さは地上から 2,265mm、機械本体は 1,050mm である。コンベアはモーターがありコンベアが独立して稼働する仕組みである。有隙桶の周囲は鉄骨で囲まれ、天井部分の鉄骨には油圧式のプレス機が取り付けられている。

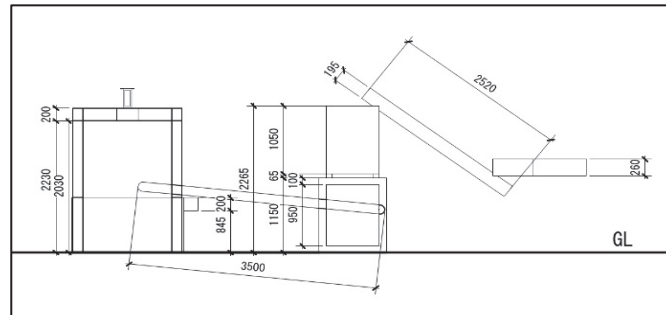


図 8-36 立面図

8-2-5 柿渋の変化

(1) 生柿渋

2020年8月19日搾汁の1番渋(7Bh)と2番渋(2.2Bh)を研究室に持ち帰った。搾汁後は、炭酸ガスが出てくる。写真左が1番渋、右が2番渋である。酸化反応により色の変化が出たのは1番渋である。絞った直後は青みが強かったが、6週間熟成させることで褐色へと変化し、比重は1番渋が5.0Bh、2番渋が1.2Bhに下がった。また、どちらも沈殿物が発生し始めたが、使用する際に取り除けば問題はない。



図 8-37 柿渋(2020. 8. 19)



図 8-38 柿渋(2020. 10. 1)

(2) 生柿渋塗装試験

以下の条件で柿渋の木材への簡易塗装試験を行った。

- ・ 期間：2020年11月15日～2021年1月5日(7週間)
- ・ 柿渋：2020年8月19日製造の1番渋
- ・ 試験木材：ラワン合板

各図 8-39,40,41 の左が未塗装、中央が1度塗り、右が2度塗りした木材である。図 8-39 は塗装後1日間乾燥した状態である。この時点で未塗装に比べても色の変化はわずかである。また刺激臭も強く、2～3日は強い臭いが残る。図 8-40 は、塗装を施してから1週間過ぎた状態であるが、2つにあまり違いはない。一方、7週間後の図 8-41 では1度塗りと2度塗りでの発色に大きな違いが出た。

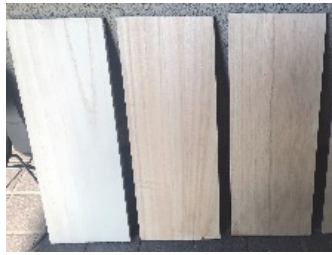


図 8-39 1日後

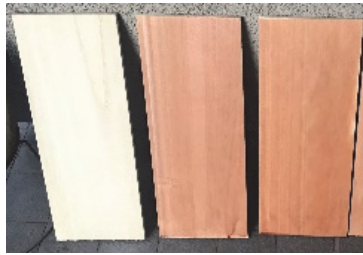


図 8-40 1週間後

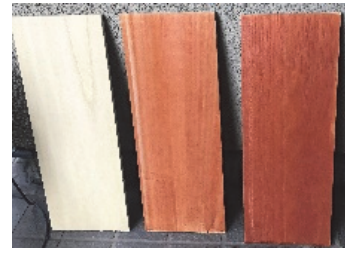


図 8-41 7週間後

(3) 熟成柿渋塗装試験

比較のため、2～3年熟成させ、製品として実際に販売されている備後柿渋による塗装試験も同様に行った。期間は、2020年12月15日～2021年1月28日(7週間)である。塗装から1週間後、1度塗り(図 8-43 左)、2度塗り(図 8-43 右)とも生柿渋よりも発色のペースが遅い。塗装から7週間経過した状態では、いずれも発色しているが、熟成柿渋は生柿渋よりも明らかに発色が遅いことが分かる。



図 8-42 1日後



図 8-43 1週間後



図 8-44 7週間後

8-2-6 考察と結論

備後地域の渋ガキの供給体制は不安定であり、収穫の担い手不足の中、原料確保が課題である。また、唯一の製造機械の老朽化が激しく、継続的なメンテナンスと部品供給体制も必要となる。いずれも工場長をはじめとする NPO 法人の限られたスタッフによるボランティアに近い運営体制であり、備後柿渋ブランド再構築などによる安定した収入確保が継承の鍵となる。

今回予行的に、柿渋の熟成経過観察と木材への簡易塗装試験も試みた。試験条件を整えて再検証し、発色の基礎データを得ることが今後の品質保証上の課題となる。

8-2-7 参考文献

- 1) 今井敬潤:柿渋,ものと人間の文化史 115,法政大学出版局,2003
- 2) 山本和史:柿渋による木材の着色仕上げに関する研究,岡山大学大学院教育研究科研究収録,第 15 号,pp.71-78,2012.7
- 3) 渡邊廣之:木部用耐候性塗料の調査研究,日本建築仕上学会 2015 年大会学術講演会 2644,pp.183-186,2015
- 4) 福田清春:木材保存における柿渋の利用,東京農工大学演研報第 33 号,pp.45-49,1995.3
- 5) 青木正明:天然染料の科学,おもしろサイエンス,日刊工業新聞社,2019.3
- 6) 寺田昌道:柿渋クラフトー柿渋染めの技法,木魂社,2000.4

8-3 地域遺産フォーラム（ギャラリー蔵フォーラム）

本研究課題着手にあわせ、2018年度から地域遺産に関する教育・研究成果について地域住民と大学が直接対話するための地域遺産フォーラムを開催している。開催場所に因み、「ギャラリー蔵フォーラム」と通称して、備後地域遺産研究会（ギャラリー蔵フォーラム実行委員会）が主催している。会場である福山市松永町の「骨董&ギャラリー喫茶蔵」は、炉切茶室「慈浩庵」をもつ築200年と伝わる塩田主（浜旦那）の宝物蔵を改修したものである。内部は大きく改修してあるが、状態の良い文化財級の蔵で、それ自身も「地域遺産」と言えるものである。地域の公共施設や行政機能を補完して、日々、住民交流や情報交換の場として機能している。目的化されがちな「コミュニティ」や「コミュニケーション」の真の意味をよく理解できる場所でもある。

2019年2月から半年に一度のフォーラム開催を計画して、2019年9月、2020年2月と3回続けた。「ギャラリー蔵を拠点とした福山市西部の地域デザイン」は、2018年度の福山大学教育振興助成金のテーマである。2019年度は、「備後地域遺産研究会によるギャラリー蔵フォーラムの開催」として、同助成金で2回実施した。しかしコロナ禍の社会情勢により、2020年9月開催予定であった第4回フォーラムは2021年2月に開催延期し、この日程も再延期した。次回、2021年9月に開催予定である。会議室や講演会場ではなく、大学の所在する福山市西部の街場において開催することの意義は極めて大きい。オンライン開催や別会場なども検討したが、関係者の多くは開催を目的化しないことを賢明に選んだ。「膝を突き合わせる」ことは今は難しいかもしれないが、対策を講じながら、地域住民との直接対話スタイルのフォーラムを続けてゆきたい。

文化財登録も視野に入れた三畳茶室（炉畳）をもつギャラリー蔵の詳細な建築調査は今後の課題である。蔵内茶室に備後畳表の導入支援をして、西部地域の核心地でその価値継承の議論も深めたい。協働で備後柿渋 Bingoxibu の新ブランドを立ち上げ、柿渋染めの畳縁などの商品開発を行っている。また、2021年4月より、瓦屋根修理プロジェクト「蔵うどふあんでいんぐ」が実施されている。



立神の丸（いちぢく）2019. 9～ 蔵うどふあんでいんぐ 2021. 4～
 図 8-45 研究会によるブランディング（チラシデザイン：河田陽依菜）



図 8-46 蔵内茶室



図 8-47 備後柿渋 Bingoxibu(構想中)

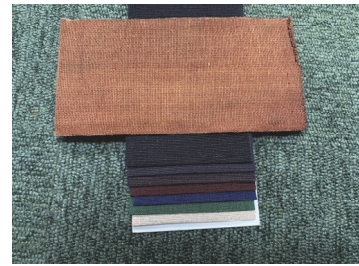


図 8-48 柿渋染めの麻畳縁(試作)

地域遺産としてのギャラリー蔵 —指定・登録未満の空間を遺す仕組み—

第1部 世界遺産と「地域遺産」

10:30～11:30 第35回世界遺産検定（NPO 法人世界遺産アカデミー主催）

11:40～13:00 自己採点と解説（佐藤圭一）

第2部 ギャラリー蔵を拠点とした福山市西部の地域デザイン

13:00～13:10 趣旨説明：佐藤圭一（福山大学建築学科・教授） 司会：島田茉奈（大阪大学）

13:10～14:10 基調講演：徳岡秋雄「備後地域における古建築修理の現場から」

（徳岡工務店／徳岡伝統建築研究所一級建築士事務所・代表取締役）

14:20～15:20 研究成果発表（福山大学備後地域遺産研究会＋地域生活空間計画研究室）

「福山に根付く能文化と能舞台」大岩智之（建築学専攻修士1年生）

「都市の逃げ道伏見町うっかり交流空間」河田陽依菜（建築学科4年生）

「地域デザインを担う 本郷町のイチジクと屋台製作」竹内感（建築学科4年生）

「備後藺草の継承と建築設計プロセス」道上拓海（建築学科2年生）

15:20～15:30 講評（徳岡秋雄）

15:40～16:30 鼎談「地域<を・で>デザインすること」ということ」

檀上宗謙（臨済宗妙心寺派西光禅寺・住職）×徳岡秋雄×佐藤圭一

展示企画（模型・ポスター） 2019.2.24～3.11

阿部神社能舞台復元（建築学科4年橘高弘憲），伏見町「うっかり」交流空間（河田陽依菜）

石庭のある本屋の家（建築学科1年石口智奈月），芦田の家，三畳茶室など



図8-49 第1回ギャラリー蔵フォーラム（2019.2.24）

第1回 ギャラリー蔵フォーラム 開催趣旨

地域遺産としてのギャラリー蔵
—指定・登録未済の空間を遺す仕組み—

「ギャラリー蔵を拠点とした福山市西部の地域デザイン」（2018年度福山大学教育振興助成金事業）という骨董&ギャラリー喫茶蔵（以下、ギャラリー蔵）と福山大学建築学科佐藤圭一教授の協働事業の成果発表が核となり、今回のフォーラムが企画されました。同時に、文化遺産保護の基礎知識を学ぶため、「第35回世界遺産検定」（NPO法人世界遺産アカデミー主催）の準会場をギャラリー蔵に設定しました。事前講習会も開催し、地域住民は、文化財や「地域遺産」に対する意識を高めてきました。そうした企画と時を同じくして、岡山在住のクラリネット奏者、熱田昭夫氏よりギャラリー蔵でのコンサート開催の打診がありました。チェロの川上徹氏、ピアノの小島裕子氏という錚々たるメンバーによるセッションというお話でした。すぐに、これを企画の夜の部に組み込ませていただきました。基調講演には、多忙極める宮大工であり、古建築設計の第一人者である徳岡工務店（三次市）の徳岡秋雄氏に基調講演いただくことが出来ました。ギャラリー蔵に縁深い、三次市の臨済宗妙心寺派西光禅寺の住職壇上宗謙氏のお寺の鐘楼が徳岡氏の設計・施工によるものであることが分かり、佐藤氏との鼎談企画が成りました。

佐藤氏が主宰する地域遺産研究会*では、様々に用いられる「地域遺産」という言葉を「有形無形を問わず、地域の人々が守り、後世に伝えたい地域の至宝」と概念規定して調査研究を進めてきました。ユネスコ世界遺産への批判的考察と、各地の事例調査に基づき暫定的に導いたものです。地域自らの遺したいという意味と、自律的な活動があることのみをその要件としています。よく使われる地域資源という考えに近いものですが、資源として消費するのではなく、活かすことで後世に遺したいという気持ちが強く現れています。先述の経緯から今回、この地域遺産の一つであり、地域コミュニティの核となっている築200年を超えるギャラリー蔵において、地域遺産に関する第1回フォーラムを開催する運びとなりました。指定も登録もされていない文化財級の建築において、その空間が継承されてきた仕組みを音楽や映像も交えながら考えてゆきます。「地域遺産としてのギャラリー蔵 —指定・登録未済の空間を遺す仕組み—」をメインテーマに、第1部から第4部のユニークな構成で様々な立場や角度から、地域遺産について討論します。

今回の企画にあたり、場当たりのなところが多々あり、関係者の皆さまにはお手数をおかけしました。2019年9月に予定しております第2回フォーラムへの布石として、ご容赦いただければ幸いです。

地域に根ざし、地域で生きてきたギャラリー蔵の10周年を一足先にお祝い申し上げます。

*佐藤氏の主宰する「地域遺産研究会」は2012年度に熊本で発足し、2015年度の佐藤氏の福山大学着任の際に、これを「備後地域遺産研究会」と「肥後地域遺産研究会」としました。2016年度より、福山大学ひとまちくらしプロジェクトに編入し、「福山大学備後地域遺産研究会」として地域協働を研究方法として、現在に至っています。そうした活動の中で、地域遺産の一つとしての「備後藁草による備後表」を対象に、地域住民や企業が直接参加できる備後表継承会を2018年4月に設立し、会長に就いています。

図 8-50 第1回フォーラム開催趣旨（原文のまま）（2019.2.24）

地域の意思として遺る「地域遺産」－文化財を観る・撮る－

プレ開催事業

2019年8月25日(日) 14:00~17:00 (検定試験受検者他)

世界遺産検定講習会「世界遺産条約と文化財保護法を知る」(講師:佐藤圭一)

2019年9月8日(日) 10:30~11:30 (事前申込者のみ)

第37回世界遺産検定(NPO法人世界遺産アカデミー主催, 文部科学省後援)

第1部 ギャラリー蔵を拠点とした福山市西部の地域デザイン

13:30~13:50 開催趣旨説明:佐藤圭一(福山大学建築学科・教授/備後地域遺産研究会・主宰)

13:50~15:00 基調講演:佐藤大規(広島大学総合博物館・学芸職員)

「文化財を観る－福山城伏見櫓・鞆の近世社寺建築調査を通じて－」

15:10~15:50 リレー講演:中嶋健明(福山大学メディア・映像学科・教授)

「文化財を撮る－鞆の浦・広島爆心地の3DCG復元を通じて－」

16:00~17:00

研究成果発表(福山大学備後地域遺産研究会/地域生活空間計画研究室&映像制作研究室)

「最新3DCG技術 福山大学未来創造館2020」三好紘平他(福山大学メディア・映像学科4年)

「備後地域における映画撮影 松永の街2019」メディア女子(福山大学メディア・映像学科3年)

「備後畳表を活かした百島商店再生－瀬戸内島嶼部の地域遺産－」大岩智之

(福山大学大学院建築学専攻修士2年生)

「備後畳表によるオリンピックデザイン」河田陽依菜(福山大学大学院建築学専攻修士1年生)

17:00~17:20 講評(佐藤大規)

17:20~18:00 鼎談「地域<を・で>デザインするということ」佐藤大規×中嶋健明×佐藤圭一

展示企画(模型・ポスター) 2019.9.15~9.30

百島商店&ゲストハウス(建築学科3年), 透明感のある幼稚園(石口智奈月), 鞆の浦CGなど

第2部

「立神の九(いちぢく)」ブランド発表など

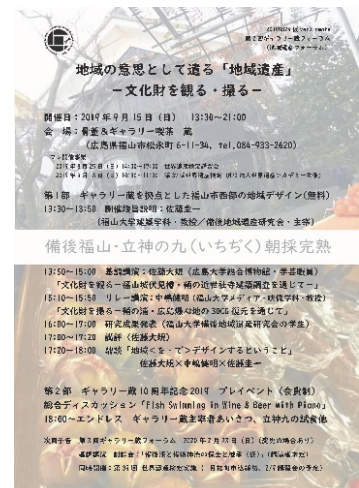


図8-51 第2回フォーラムのチラシ(2019.9.15)

「地域遺産」に触れる —備後柿渋の採・搾・塗・染—

プレ開催事業

2020年2月9日(日)(世界遺産検定試験受検者他,参加自由)

- 13:30~16:30 世界遺産検定講習会(講師:西森正明,世界遺産アカデミー認定講師)
17:00~ 講師を囲って世界遺産談義

第1部 第39回世界遺産検定(NPO法人世界遺産アカデミー主催,文部科学省後援)

10:30~11:40 (2,3,4級実施,事前申込者のみ)

第2部 ギャラリー蔵を拠点とした福山市西部の地域デザイン

13:30~13:50 開催趣旨説明:佐藤圭一(福山大学建築学科・教授/備後地域遺産研究会・主宰)

13:50~14:50 基調講演:黒木香苗(NPO法人ぬまくま民家を大切にすの会・理事)

「備後柿渋を搾る —備後渋の生産実態と保全活動—」

15:00~15:40 リレー講演:前岡範行(高橋工芸株式会社・常務取締役)

「備後柿渋を塗る —府中家具の来し方・行く末—」

15:50~17:00

研究成果発表(福山大学備後地域遺産研究会/地域生活空間計画研究室&映像制作研究室)

「鞆の浦の防潮堤における柿渋塗り提案 —瀬戸内沿岸部の景観保全—」

河田陽依菜(福山大学大学院建築学専攻修士1年)

「備後畳表を活かした百島商店再生 —瀬戸内島嶼部の地域遺産— その2」

(+「備後三蔵動力中継織機」動画)

岡田紘汰(福山大学建築学科3年)

「The Creek —松永クreek活用計画—」

片山マリヤ(福山大学建築学科4年)

「福山旧城下町に現存する能舞台の復元的研究—阿部神社と三蔵稻荷神社能舞台の保存と継承—」

大岩智之(福山大学大学院建築学専攻修士2年)

「最新3DCG技術—福山大学未来創造館2020— その2」(+備後三蔵動力中継表施工計画)

三好紘平+中村大樹(福山大学メディア・映像学科4年)

17:00~17:20 講評(黒木香苗)

17:20~18:00 鼎談「地域<を>・で>デザインするということ」

杉原一正(Issey Studio 主宰)×前岡範行×佐藤圭一

展示企画(実作・模型・ポスター) 2020.2.23~3.1

The Creek—松永クreek活用計画—(片山マリヤ)

幼稚園・集合住宅・オフィスビル(石口智奈月)

カキシブ・チェア実作(三島千乃・平田ゆう)

三畳茶室,鞆の浦防潮堤,備後三蔵中継織機の再生

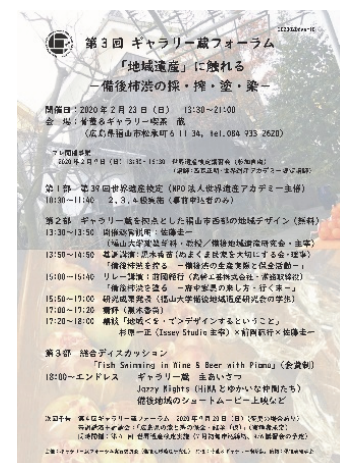


図 8-52 第3回フォーラムのチラシ(2020.2.9)

8-3-4 2021.9.12 (予定) 第4回 ギャラリー蔵フォーラム
(2020.9.13 延期、2021.2.21 再延期)

「地域遺産」を繋ぐ ーウルシを作り、漆で創るー (案)

プレ開催事業

2021年8月29日(日)世界遺産検定講習会(世界遺産検定試験受検者他,参加自由)
13:30~16:30 世界遺産検定講習会(講師:西森正明,世界遺産アカデミー認定講師)
17:00~ 講師を囲って世界遺産談義

第1部 第45回世界遺産検定(NPO法人世界遺産アカデミー主催,文部科学省後援)
10:30~11:40 (2,3,4級実施,事前申込者のみ)

第2部 ギャラリー蔵を拠点とした福山市西部の地域デザイン

13:30~13:50 開催趣旨説明:佐藤圭一(福山大学建築学科・教授/備後地域遺産研究会・主宰)
13:50~15:00 基調講演:大塚智嗣(広島市立大学芸術学部・教授)
「広島ウルシの栽培と漆創作」(仮)
15:10~15:40 リレー講演(未定・大塚研究室学生)
15:50~17:00 研究成果発表(福山大学備後地域遺産研究会の学生など)
17:00~17:20 講評(大塚智嗣)
17:30~18:00 鼎談「地域くを・で>デザインするということ」
(未定)×大塚智嗣×佐藤圭一
展示企画:漆作品など(蔵アネックス和室にて)

次回予告 第5回ギャラリー蔵フォーラム 2022年2月(変更の場合あり)
基調講演+討論会:「広島県の茅の保全・継承(仮)」(登壇者未定)
同時開催:第47回世界遺産検定実施+事前講習会

第3部(予定)

1. 「蔵うどぶあんでいんぐ」報告
2. 『評伝 倉田久士』(仮)編集刊行準備委員会発足
3. 「備後柿渋 Bingoxibu」ブランド発表
4. トレーサビリティ実証実験その4
「三畳茶室「慈浩庵」(ギャラリー)表替え(柿渋麻縁)」

図8-53 第3回フォーラムのチラシ
(2021.2.21 延期開催予定日)



9. 備後地域内外に残る能舞台や能楽堂の予備調査と復元

9-1 福山旧城下町に現存する能舞台の復元的研究

－阿部神社能舞台と三蔵稲荷神社能舞台の保存と継承－^{注14}

9-1-1 序論

(1) 背景

広島県福山市には3つの能舞台と1つの能楽堂が現存する。阿部神社(備後護国神社)^{注15}(福山市丸之内)と三蔵稲荷神社(丸之内)、沼名前神社(鞆町)にある3つの能舞台と喜多流大島能楽堂(光南町)である。三蔵稲荷神社の能舞台は、福山八幡宮(旧両社八幡宮)^{注16}から縮小移築されたものである。対象数は多くないが福山市という限られた地域に、いずれも旧福山藩ゆかりの多様な類型の能舞台が存在する。近接して建つ阿部神社と三蔵稲荷神社の両能舞台に関しては、福山旧城下町の重要建築遺構であるにも関わらず、これまでの城下町研究の対象とされておらず、史料も散逸して、正確な現況図面もない。

福山市では、2022年の福山城築城400年に向けた様々なイベントが開催され、地域の文化財に対する関心も深まっている。福山市は、文化庁の『歴史文化基本構想』策定技術指針(2012年2月策定)に基づき、2018年1月に「福山歴史文化基本構想」^{注17}を策定した。その構想策定の一環として、福山市は文化財を指定・未指定、有形・無形に関わらず広く現状を把握する基礎調査を行った。これまで停滞した福山市における文化財の保全と活用が動き出している。旧福山藩では、水野氏5代、阿部氏10代の歴代藩主らの庇護のもと、盛んに演能された記録が残る^{文献3)}。



図9-1 福山市に現存する能舞台と能楽堂
(国土地理院電子地図より作成)

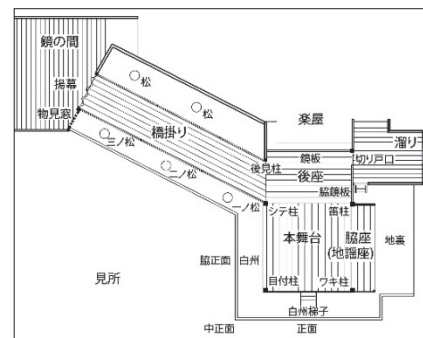


図9-2 能舞台模式図(国立能楽堂モデル)
(文献4より作成)

¹⁴ 本項は、以下を加筆修正して再編したものである。佐藤圭一、大岩智之：福山市に現存する能舞台と能楽堂の空間構成に関する研究 その1～6－、日本建築学会中国支部研究報告集および大会学術講演会、2019.3-2021.9、及び2020年度福山大学大学院建築学専攻修士論文「福山旧城下町に現存する能舞台の復元的研究－阿部神社能舞台と三蔵稲荷神社能舞台の保存と継承－」(大岩智之著)、2018年度福山大学建築学科卒業論文「旧阿部神社能舞台の実測と記録」(橋高弘憲著)

¹⁵ 能舞台を対象とする本研究では、後述する阿部神社と備後護国神社の歴史的経緯を踏まえ、また能舞台が戦前の阿部神社時代の遺構であることから、初出のみ備後護国神社を併記し、以後、阿部神社と表記する。現在、阿部神社は、備後護国神社の境内社であり両社が同地に存在する。

¹⁶ 本研究では、両社八幡宮時代の能舞台の復元を目的とするため、初出のみ福山八幡宮を併記する。

¹⁷ 文献2参照。2018年2月、福山市主催の「福山歴史文化基本構想講演会」において、中央地区を担当したのが喜多流能楽師の大島衣恵氏である。「伝え継ぐ福山の能」という講演の中で、阿部神社能舞台や三蔵稲荷神社能舞台について紹介したことが、本研究着手のきっかけとなった。

(2) 目的

本項は、阿部神社能舞台と三蔵稲荷神社能舞台を対象として、史料分析と臨地調査によって、その空間構成と史的変遷過程を建築学の視点から明らかにし、旧福山藩ゆかりの能文化と歴史的建造物の保存と継承に寄与することを目的とする。

(3) 方法

現地調査によって入手した阿部神社、三蔵稲荷神社、旧両社八幡宮能舞台が描かれた絵図、古写真、図面を分析し、その変遷を読み解く。また、阿部神社能舞台と三蔵稲荷神社能舞台の実測調査を行い意匠図と構造図を作製し、分析を行う。将来の比較研究のため、本項では、福山市に現存する国指定重要文化財に関する『沼名前神社能舞台修理工事報告書』^{文献 5)}を参照して図面作製し、記述した。

(4) 既往研究

能舞台や能楽堂に関する研究は、芸術学や民俗学など建築学の範疇にとどまらない超領域的視点が必要となる。建築学においても近年、松永ら^{文献 6)}が能舞台の空間構成と世阿弥の「序破急五段」の関係性を謡や囃子などの音データを分析することで明らかにする独創的な研究成果をあげている。また奥富^{文献 7)}は、舞台と見所が一体となった近代建築としての能楽堂の成立過程を解き明かし、精力的に研究成果を発表している。さらに辻ら^{文献 8)}は、観客席（見所）の領域区分（正面、脇正面、中正面、地裏）に着目して、その生成過程を上演形式との関係から明らかにし、研究展開している。特定地域に分布する能舞台については兵庫県、奈良県、京都府の近畿地方において大岸ら^{文献 9)10)}が、建築学的な論考をまとめている。能舞台が集中分布する佐渡・若狭においては、磯部、宇野、小林ら^{文献 11)~18)}が網羅的に現地調査を行い、神社に付属する能舞台に関して、社殿と能舞台の配置の類型化し、また平面分析して、その空間構成を考察している。

福山市の能舞台に関しては、国指定重要文化財である沼名前神社能舞台（1953年指定）の修理工事報告書^{文献 5)}（1959年）がある。現存唯一の移動式能舞台の遺構に関するまとまった調査データであるが、移築までの変遷過程についての論考は乏しい。阿部神社能舞台や三蔵稲荷神社能舞台、大島能楽堂に関しての建築学的論考はない。

9-1-2 絵図・古写真分析による阿部神社能舞台の建築年代推定

(1) はじめに

本節では、史料が少なく散逸し、また喫緊の保全対策が必要な阿部神社能舞台に焦点を絞り、臨地調査により現状を把握し、絵図と古写真を分析して変遷過程を明らかにし、その建築年代を検証する。阿部神社能舞台が描かれた絵図と古写真を収集し、その変遷を読み解く。本節で分析対象とするのは、入手できた5種（6枚）の絵図と3種（4枚）の古写真である。

- (1) 城北松山勇鷹神社・松山天神社図[作製年代不詳]（福山城博物館所蔵）
- (2) 福山城負小丸山防備測量図[1864(元治元)年]（福山市歴史資料室所蔵）
- (3) 福山城(偕楽園)並びに勇鷹神社絵図[1875~88(明治8~21)年頃]（福山市歴史資料室所蔵）
- (4) 阿部神社の古写真（ガラス乾板）[1897(明治30)年] 2枚（福山城博物館所蔵）
- (5) 阿部神社之真景[1901(明治34)年]（『広島県神社仏閣図録』所収）
- (6) 阿部神社の古写真[1942(昭和17)年]（喜多流大島能楽堂所蔵）
- (7) 阿部神社の古写真[1946(昭和21)年]（喜多流大島能楽堂所蔵）
- (8) 寺本左近筆福山市鳥瞰図[1952(昭和27)年, 1953(昭和28)年]（福山城博物館所蔵）

(2) 阿部神社と備後護国神社

阿部神社は、1813（文化10）年、福山城主阿部氏五代の正精が勇鷹神社を現地に造営したことに始まり、阿部家歴代藩主を合祀する^{文献19}。1877（明治10）年に阿部神社と改称する。備後護国神社の前身である福山護国神社（その後、備後神社に改称）は遷座予定であったが、竣工間近に戦災で焼失する。そのため1957（昭和32）年になり、備後神社と阿部神社が合併し、天神山（松山）にある阿部神社の現地に備後護国神社を設立して現在に至る^{文献19}。

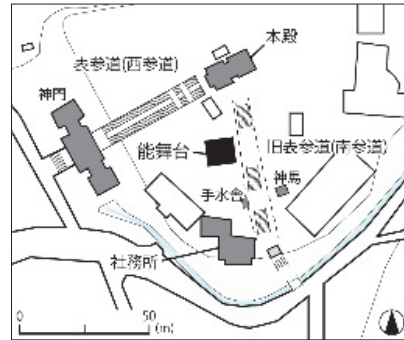


図 9-3 現在の阿部神社能舞台と南参道（南東方向から撮影） 図 9-4 現在の阿部神社・備後護国神社 境内配置図
（2018. 3. 12 撮影） （国土地理院電子地図より作成）

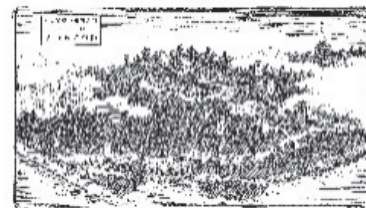


図 9-5（左）城北松山勇鷹社・松山天神社図（作製年代不詳）
[福山城博物館所蔵 濱本文庫 No. 533]

図 9-6（中）福山城（偕楽園）並びに勇鷹神社絵図（1875～88年）
[福山市歴史資料室所蔵 東京阿部家文書 No. 880-5]

図 9-7（右）阿部神社之真景（1901年） [出典：文献23]

(3) 小結

収集した8種の絵図・古写真の分析によって、阿部神社能舞台は、1864年以降現在地に建築されたと考えられ、1875～88年頃までに建築されていた可能性がある。1875～1888年作製と考えられる絵図に描かれた建築が現在の能舞台建築ではないとしても、古写真から遅くとも1897年までには橋掛りも含めて建築されていたと考えられる。1901年の絵図に描かれている橋掛りと鏡の間（楽屋）は、現在のものを描いたものであると推察できる。その後、1946年以降に鏡の間（楽屋）、1952年以降に橋掛りが撤去されたか崩壊して、現在の姿になったと考えられる。

9-1-3 阿部神社能舞台の復元図面（意匠図・構造図）作製

(1) はじめに

本節は、実測調査を基に、阿部神社（備後護国神社）能舞台の復元図面（意匠図・構造図）を作製し、将来の再生（修理、復元、転用）のための基礎資料を残すことを目的とする。現状を把握すると共に、推定復元の平面図、立面図、断面図、天井伏図、屋根伏図、小屋伏図、小屋梁伏図、床伏図、3DCG を作製した^{注18}。現在、内部は倉庫として使用されているため、正確な内部調査は行えなかった。屋根と小屋組は、写真撮影と目視による推定寸法である。また、現地調査の過程で、橋掛りの床材であったと思われる 12 枚の板材（厚さ約 60mm）を舞台下から発見した。

喜多流大島能楽堂から提供いただいた 1942 年撮影のものとして「昭和 21.5.19 阿部神社」と記された古写真、福山城博物館所蔵の 1897 年の古写真を参考資料とした。これら貴重な古写真史料と実測調査を基に、能舞台の復元図面作製を行う。



図 9-8 (左) 阿部神社能舞台の古写真 (1942 年)

[喜多流大島能楽堂所蔵]

図 9-9 (中) 同上「昭和 21.5.19 阿部神社」(一部画像加工)

[喜多流大島能楽堂所蔵]

図 9-10 (右) 阿部神社能舞台の古写真 (1897 年)

[福山城博物館所蔵 資料 No. 02-07]

(2) 現状と推定復元図

(2)-1 配置と構造・意匠概要

阿部神社の本殿は天神山（松山）の山頂付近にあり、正面は元々南面し、本殿から南向きの表参道が傾斜地に階段で繋がっていた。能舞台は旧表参道（南参道）沿いの 1 段下の敷地にあるが、橋掛りや鏡の間、楽屋のような付属建築はなく、外周と床はコンパネが常時張られて、神社の倉庫として使われている。そのため、外観からは能舞台の存在に気付かず、市民や文化財の専門家にも能舞台の存在は知られていない。

現在の能舞台は、東を正面とする入母屋造で、妻入り、棧瓦葺きである。北と西側に下屋がかかる。西側は崖上に建ち、3、4 段の石垣に石土台（石基礎）がのる。見所、橋掛り、鏡の間、楽屋等の付属建築はなく、本舞台、後座、脇座（地謡座）、楽屋（もしくは溜り）からなる 1 棟である。本舞台と後座には、能舞台としては珍しく竿縁天井が張られている。脇鏡板の西端に北に向かって切り戸口を設ける。



図 9-11 南西崖下から撮影 (2018.3.12)

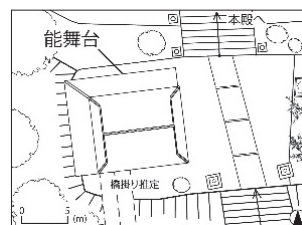


図 9-12 能舞台配置図 (国土地理院電子地図より作成)

¹⁸ 実測調査及び図面作製、3DCG 制作にあたっては、福山大学建築学科佐藤圭一研究室+備後地域遺産研究会（福山大学ひと・まち・くらしプロジェクト）の学生メンバーが中心となった。本章の一部は、2018 年度福山大学工学部建築学科卒業論文「旧阿部神社能舞台の実測と記録」（橋高弘憲著、2018.12）が基となっているが、その後の調査分析により、これを大幅に加筆修正して改稿したものである。

(2)-2 平面

阿部神社能舞台の本舞台は、桁行 5,761×梁間 5,808 mm（柱芯々、以下同様）であり、1 間＝約 6 尺 5 寸の京間を基準尺とし、ほぼ正方形である。約 150mm（5 寸）角の笛柱、脇柱、見付柱、仕手柱からなる。後座南側に、橋掛りが接続していたと思われるが現在はなく、その痕跡もコンパネで覆われているため確認できない。写真 3-2 から、橋掛りは 3 間がほぼ直交して接続していると考えられる。

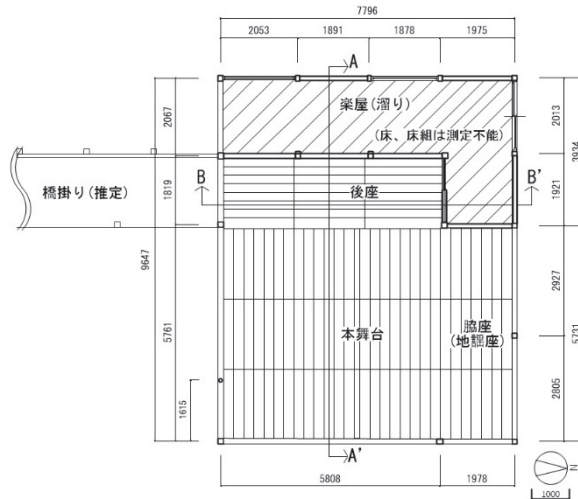


図 9-13 復元平面図(1/200) (橋掛り部分は推定)

(2)-3 屋根

阿部神社能舞台の南と西側は崖になっており、崖下は樹木が生い茂っている。破損が目立つ箇所は崖側の屋根であり、落ち葉などで風化が早まったためと思われる。特に楽屋北西の隅棟脇の屋根は、瓦が欠損して野地板と垂木も朽ちて 600mm 四方ほど大きく穴が空いて、雨が床まで直に入る状態である。西側下屋の軒瓦も損壊の度合いが大きく、日常的に通行する場所ではないが、瓦が落下する危険性がある。棟南側の屋根瓦破損箇所下方の小屋と天井が腐朽している。棟瓦は、東側 1/3 程度が欠損して、土葺きが露出している。

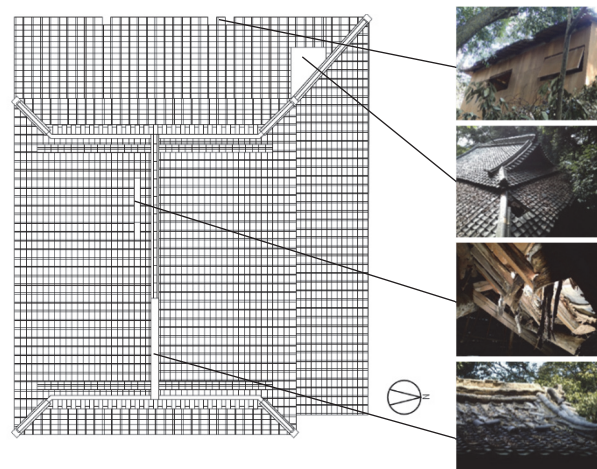


図 9-14 屋根伏図(1/200)現状と屋根の破損・欠損箇所

(3) 小結

本章では阿部神社能舞台の復元図面を作製し、寸法分析（意匠図と構造図）を行った。現在は無い橋掛りについても史料と現地調査から可能な限り復元考察した。腐朽が進む能舞台の現況を把握し、将来の再生(修理、復元、転用)ための基礎資料は作成できたが、橋掛りも含めた能舞台としての復元や、大規模修理を現実に行うことは容易ではない。現在の福山の礎である旧福山城下町において、戦災で焼け残った数少ない現存建築である。また、旧藩主阿部家だけでなく、能楽を福山の地域文化として現在に伝える喜多流大島家にもゆかりが深い。これを後世に継承するためには、屋根破損部分だけでも緊急措置を講じ、転用も含めて、保全・活用を検討することが望まれる。

9-1-4 旧両社八幡宮能舞台の変遷過程と復元

(1) はじめに

旧両社八幡宮から三蔵稲荷神社への能舞台の縮小移築に至る変遷過程を収集した図面と絵図、古写真から分析し、かつての能舞台の配置を特定し、その概形を復元することを目的とする。本章が分析対象とするのは、入手できた3枚の図面と1枚の絵図、7枚の古写真である。2018年12月20日、三蔵稲荷神社で聞き取り調査を行い、所蔵する「史跡『福山城跡』 三蔵稲荷神社現状変更行政指導及説明書」^{注19}という移築過程を記録した資料や図面を入手した。2019年11月17、21日、福山八幡宮の現地調査の際に、聞き取りを行い、移築前の希少な古写真を入手した。

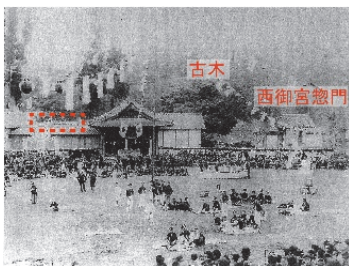


図 9-15 移築前の旧両社八幡宮能舞台全景
(破線部分が脇部屋屋根) [福山八幡宮所蔵]

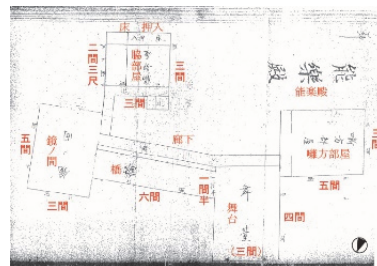


図 9-16 両社八幡宮能舞台 移築前平面図「能楽殿」に加筆
[三蔵稲荷神社所蔵]

(2) 三蔵稲荷神社と福山八幡宮

(2)-1 現存する能舞台と能楽堂

現在、福山市鞆町にある沼名前神社能舞台は、旧城下町から離れているが、伏見城（京都）から旧福山城下を経て、万治年中(1658～1661年)に現地に移築・半固定（後に固定）されたものである^{文献5}。他の3つは福山市中心部にあり、阿部神社と三蔵稲荷神社の能舞台は、戦災を逃れて福山旧城下町内に現存する貴重な建築遺産である。

旧両社八幡宮能舞台の創建は本殿と同じ1683年とされるが、安政の大地震(1854年)で大破し、1857年に再建された棟札が三蔵稲荷神社に残る²⁵。その後、1944年に老朽化で取り壊しになることを三蔵稲荷神社が買い取り^{注20}、現在の位置に縮小移築された。三蔵稲荷神社に移される際に、舞台や橋掛りは縮小され、鏡板の一部は分断されている。鏡の間や溜りなどの付属部屋も現存しない。

¹⁹ 「史跡「福山城跡」 三蔵稲荷神社現状変更行政指導及説明書」は、図面資料も含め他の書類と共にファイルされた三蔵稲荷神社所蔵の私家版資料である。「受付 57.12.22 三蔵稲荷神社」の印がある。

²⁰ 三蔵稲荷神社宮司石川紘彦氏からの聞き取りによる。



図 9-17 現在の三蔵稲荷神社能舞台 全景 (2018. 3. 27 撮影)

(2)-2 福山八幡宮 (旧両社八幡宮)

福山八幡宮は、1683(天和 3)年に、4代福山藩主・水野勝慶(勝種)が、現地である松廻尾山に2社の八幡宮を遷座し、西御宮・東御宮として社殿を造営したものである^{文献 19)26)}。2社の社殿を東西に並べ、本殿、幣殿、拝殿、随神門、総門などそれぞれ全く同じ規模と形態で建てられている。1739(元文 4)年に、両社の修理が行われた棟札が残る^{文献 26)}。その由緒から、かつての西御宮は野上八幡神社、東御宮は延広八幡神社と称され、合わせて両社八幡宮と呼ばれていた^{文献 19)}。1969年に両社の法人格が合併され、社名が福山八幡宮となった。神社本庁の別表神社である。両社社殿建立 300 年を記念して、1984年に東御宮の屋根葺き替えを始め、両社中央背後にあった聰敏神社を西の現地に移転し、中央拝殿を新築して境内を整備した^{文献 19)}。



図 9-18 (左)現在の福山八幡宮配置図 (国土地理院電子地図より作成)

図 9-19 (中)中央拝殿に向かって右奥が東御宮 (2020. 1. 2 撮影)

図 9-20 (右)駐車場からみた社務所 (2019. 11. 18 撮影)



図 9-21 社務所からみた本殿方向 (2019. 11. 18 撮影)



図 9-22 東御宮参道



図 9-23 西御宮参道

(3) 小結

主に前述の図版資料から移築前の旧両社八幡宮能舞台は図 4-4 に示す通り、現在の駐車場南端の社務所付近に舞台正面が北北西に向いて建っていたと考えられる。舞台 3 間、橋掛り 6 間、鏡の間 3 間と溜り 4 間の東西全長 16 間(約 29m)の大規模なものであった。「脇部屋」(楽屋)が移築直前まで存在したとすると、付属部屋 3 室を備える本格的なものであった。旧両社八幡宮は東

西に参道と拝殿がそれぞれあり、参道を遮ることなく、両社に対して同時に能舞台の正面性を確保できた^{注21}。舞台や見所と本殿敷地には高低差があり、また茂った木立を経て視覚的に分断されているので、観客が本殿に対して背を向ける意識は薄かったと思われる。「前の丘陵に反響して、小鼓音の音・地謡の声もよく通り」^{文献 26)}という描写もある。奉納能として、同時に2社に対する正面性確保し、大人数を収容できる見所（広場）を設けることを考えると、理想的な社殿と能舞台の配置ともいえる。

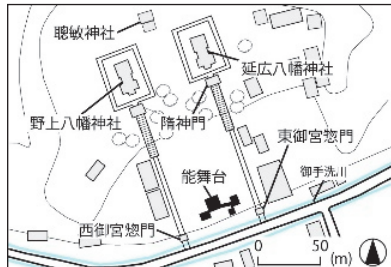


図 9-24 旧両社八幡宮 配置復元図（1940年代の移築直前）

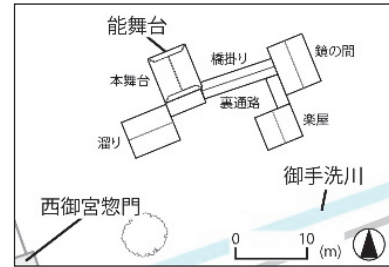


図 9-25 能舞台 屋根伏復元図

（国土地理院電子地図より作成）

9-1-5 三蔵稲荷神社能舞台の実測図面作製とその保存・活用

(1) はじめに

阿部神社と三蔵稲荷神社の能舞台は、旧城下町内に近接して現存する重要な建築遺産にもかかわらず、これまでまとまった研究がなかった。三蔵稲荷神社境内は、現在、国史跡「福山城跡」の指定域である。本節では、史料を基に移築計画を分析し、実測調査により縮小移築された三蔵稲荷神社能舞台の実測図面を作製し、将来の復元や活用の可能性について検討することを目的とする。

三蔵稲荷神社能舞台の実測調査に基づき配置図、平面図、立面図、断面図、天井伏図、屋根伏図を作製した。2018年12月20日に、三蔵稲荷神社で聞き取り調査を行い、所蔵資料を提供いただいた。現在の社務所新築時の史跡変更手続きの記録された、「史跡『福山城』 三蔵稲荷神社現状変更 行政指導及説明書」一式と図面資料を入手した。

(2) 配置と構造・意匠概要

現在の能舞台は参道に向かって建ち、北側背後は崖になっている。旧両社八幡宮能舞台は北を舞台正面として、両社参道の中央の広場にあったが、現在は南を舞台正面とする。移築前と同様、入母屋造で、妻入り、棧瓦葺きである。北側の後座に下屋がかかる。鏡の間、溜り、楽屋等の付属建築はなく、脇座（地謡座）もない。本舞台、後座、橋掛りのみからなる。



図 9-26 三蔵稲荷神社能舞台 本舞台（2020.1.2 撮影）

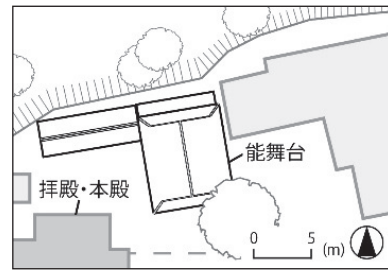


図 9-27 能舞台配置図（国土地理院電子地図より作成）

²¹ 社殿と能舞台の配置については、文献 12 などの論考を参照した。

(3) 能舞台の実測図

(3)-1 平面図

能舞台の本舞台の大きさは移築前の3間四方が基本であり、本舞台は四隅以外に柱はない。三蔵稲荷神社能舞台の本舞台は、桁行4,090×梁間4,291mm（柱芯々、以下同様）であり、移築前から縮小されている。床板の大きさは1枚およそ縦4,100×横300mm（×厚さ不明）である。後座は南北1,850×東西4,291mmであり、約1間の奥行きをもち、橋掛りと引き戸によって接続している。後座の奥行き寸法より柱2つつくらい橋掛りが広がっている。移築前は約83～87度で斜交していたが、直交している。反対側の後座側面には切戸口があり、脇鏡板に竹が描かれている。後座奥行きは、一見移築前の規模であるが、移築前は1間半であるのでこれも縮小されている。

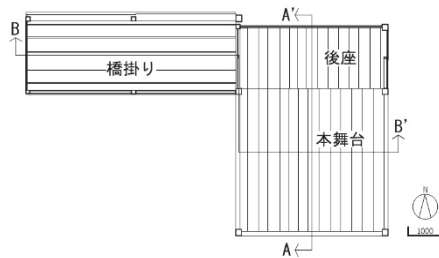


図 9-28 平面図 (1/200)

(3)-2 立面図

本舞台も橋掛りも束石の上に柱が直接建ち、石土台が周囲を巡っている。現在は、本舞台の梁と柱が鉄の方杖で8か所補強されている。頭貫には木鼻、頭貫上には紋が刻まれた板幕股、破風には懸魚がつく。橋掛りは現在、側面と端面に常時板が張られ、後座との接続部には引き戸が設えられ、室化して倉庫として使われている。切戸口はあるが、その先に室はない。段階（きざはし）は可動式のものであるが、普段は橋掛り側の本舞台西側面に設置されている。

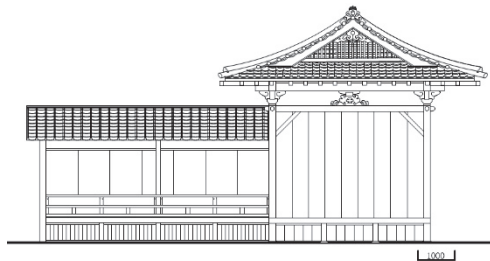


図 9-29 南立面図 (1/200)
(橋掛りの壁板を除いた状態を復元)



図 9-30 (左) 橋掛り (右) 鉄材方杖
(2018. 3. 15 撮影)

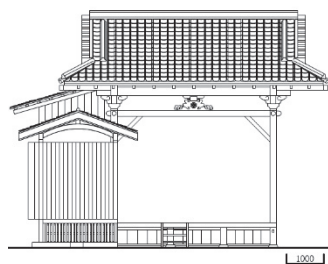


図 9-31 西立面図 (1/200)

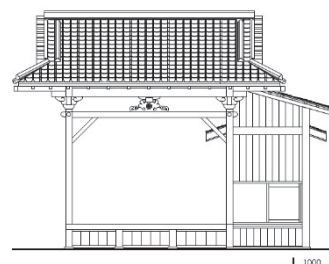


図 9-32 東立面図 (1/200)

(4) 能舞台の規模比較

旧両社八幡宮能舞台の復元図面と移築後の実測図の平面比較を行った。旧両社八幡宮能舞台の高さは分からないが、古写真などから計画図棟高 20 尺(6,060mm)や現状最高高さ 6,400mm 程度だったと考えてよいだろう。現在、舞台平面が大幅に縮小されているにも関わらず、高さ方向はほとんど縮小されておらず、屋根は高く、大きく、アンバランスなプロポーションで建つ。平面は、大規模な能楽堂として代表的な国立能楽堂（東京都渋谷区）の溜りから鏡の間まで(28.1m)と同規模の本格的なものである。これを三蔵稲荷神社境内に配置すると、図 9-34 のようになり、現在の住宅部分を再配置しても、本殿や参道を移設しない限り同規模での復元や復興再建は難しい。

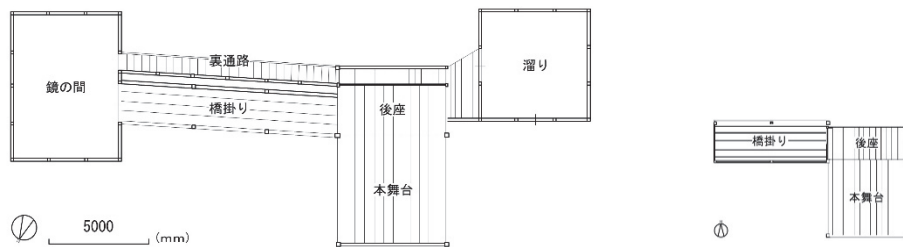


図 9-33 旧両社八幡宮能舞台と三蔵稲荷神社能舞台の平面比較（いずれも 1/400）

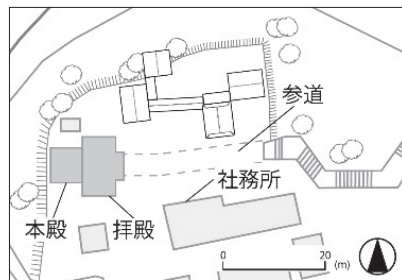


図 9-34 三蔵稲荷神社境内での能舞台復元配置（国土地理院電子地図より作成）

(5) 小結

三蔵稲荷神社能舞台は 1980 年頃に一度復元が計画されている。現在の神社関係者も望んでいる通り、将来の再生方法として、移築前の状態への復元も考えられる。しかし、敷地も狭く現地での完全復元は難しい。現在、この能舞台は福山市で唯一、常時無料で一般開放されて見学できるものである。手入れも行き届いて保存状態もよく、神社や地域のイベントなどにも積極活用されている。付属部屋のある本格的な能舞台への再生はすぐには難しくとも、能舞台建築としての最大の特徴である橋掛り部分の修理と活用が考えられる。引き戸を取り払い、室化している橋掛りを開放することで、幕末の遺構である貴重な能舞台空間を直に体験できる。あわせて、由緒ある鏡板絵（松と竹）の文化財としての復元を期待したい。

9-1-6 まとめと今後の課題

阿部神社能舞台の臨地調査により現状を把握し、絵図と古写真を分析して変遷過程を明らかにし、その建築年代を推定した。復元図面を作製し、腐朽が進む能舞台の現況把握と基礎資料は作成できた。

三蔵稲荷神社能舞台に関しては、図面資料と絵図、古写真から移築前の旧両社八幡宮能舞台の配置を特定し、概形を復元した。史料を基に移築計画を分析し、実測調査により縮小移築された三蔵稲荷神社能舞台の実測図面を作製し、将来の復元や活用の可能性について検討した。

今後、沼名前神社能舞台の移築に関する歴史的経緯や大島能楽堂の新旧3つの能舞台についても調査研究が進むと、福山地域に根付いた能文化の近世初期から近現代にいたる通史的な理解が深まる。

9-1-7 参考文献

- 1) 田中伸治：福山城本丸御殿の実態について－御殿規模の復元を試みる－，備陽史研究 第24集，備陽史探訪の会，pp.31-46, 2016.5
- 2) 福山市教育委員会：福山市歴史文化基本構想，2018.3
- 3) 福山城博物館友の会：古文書調査記録第34集 福山語伝記，2016.8
- 4) 川添登：世界建築設計図集7 国立能楽堂 大江宏，象形社，1984.7
- 5) 重要文化財沼名前神社能舞台修理委員会：重要文化財沼名前神社能舞台修理工事報告書，1959.7
- 6) 松永直美，矢吹信喜，亀山勇一，福田知弘：世阿弥以降の能舞台様式の変化と『序破急五段』の関係性の研究，日本建築学会計画系論文集 81 第728号，pp.2317-2326, 2016.10
- 7) 奥富利幸：近代国家と能楽堂，大学教育出版，2009.2
- 8) 辻慎一郎，光井渉：明治期における能楽専用施設の観客席空間 芝能楽堂の観客席における領域区分の生成について，日本建築学会計画系論文集 82 巻735号，pp.1231-1237, 2017.5
- 9) 大岸文夫，佐藤勝行：兵庫県の神社に現存する能舞台の平面と社殿構成に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第598号，pp.43-50, 2005.12
- 10) 大岸文夫，佐藤勝行：奈良県北部および京都府南部の神社に現存する能舞台・社殿構成に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第621号，pp.9-14, 2007.11
- 11) 磯部邦夫，佐藤孝義：佐渡能舞台の調査・研究，日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)，pp.703-704, 1980.9
- 12) 磯部邦夫，佐藤孝義：佐渡能舞台の調査・研究－その2－(能舞台の方位と社殿配置について)，日本建築学会大会学術講演梗概集(九州)，pp.1101-1102, 1981.9
- 13) 宇野浩生，土本俊和，笹川 明：佐渡、若狭能舞台の平面構成，日本建築学会計画系論文集 第554号，pp.139-146, 2002.4
- 14) 磯部邦夫：「佐渡、若狭能舞台の平面構成」に対する討論，日本建築学会計画系論文集 第575号，pp.207-208, 2004.1
- 15) 宇野浩生，土本俊和，笹川 明：磯部邦夫氏の討論に対する回答，日本建築学会計画系論文集 第575号，pp.209-210, 2004.1
- 16) 宇野浩生，土本俊和，笹川 明：若狭能舞台の類型化と地域分布，日本建築学会計画系論文集 第563号，pp.155-162, 2003.1
- 17) 論文集委員会：「佐渡、若狭能舞台の平面構成」の討論についての論文集委員会の見解，日本建築学会計画系論文集 第575号，pp.211, 2004.1
- 18) 小林貢，池田哲夫：佐渡能楽史序説－現存能舞台三五棟－，高志書院，2008.9
- 19) 広島県神社庁：広島県神社誌，1994.8
- 20) 福山市史編纂会：濱本文庫書目解題，福山市史編纂史料（第1集），1955.1
- 21) 福山城博物館：絵地図で見るふくやま ～古地図の世界～，2001.10（復刻版）

- 22) 鐘尾光世：福山城公園盛衰記(その 3)－福山公園(偕楽園)並びに勇鷹神社絵図を読む－，アーカイブスふくやま 第 4 号，福山市，pp.40-43, 2013.3
- 23) 三村義人：明治三十四年 広島県神社仏閣名所図録，三稀堂，1989.1（復刻版）
- 24) 福山城博物館友の会：地図絵図でたどる福山の歴史，福山城博物館，2017.10
- 25) 福山市教育委員会，福山市文化財保護委員会：福山市文化財年報－昭和 40 年－，1966
- 26) 福山市史編纂会：福山市史 近世編，1968.3, 1978.7(再版)
- 27) 平井隆夫監修：目で見ると読む 福山・府中の 100 年，郷土出版社，1997.3
- 28) 福山市鞆の浦歴史民俗資料館：沼名前神社能舞台をめぐる－能に夢中の秀吉より－，1999.10
- 29) 松浦健治郎：吉田初三郎鳥瞰図に描かれた昭和初期の官庁街の立体的空間構成 近世城下町を基盤とする県庁所在都市 18 都市を対象として，日本建築学会計画系論文集，vol.602, pp.105-112, 2006

10. 備後地域外での建築、集落、風習など地域遺産比較調査

主に研究最終年度の 2020 年度に予定していた遠隔地である備後地域外との比較調査は、コロナ禍の社会情勢により、臨地調査は全く実施できなかった。特に、産地の限られている藺草（熊本や石川など）や柿渋（京都や岐阜など）に関して、地域間で比較調査を行うことで、「地域遺産」の概念をさらに浮き彫りにすることができると考えていた。一方で、福山大学近隣の松永塩田跡や備後柿渋工場などを調査フィールドにすることで、ゆっくり時間をかけて近隣地域をより深く調査研究することができた。

遠隔地においては、本研究課題の予備的調査として、2018 年度福山大学教育振興助成金事業における遠隔地研修を行った。2 年生 2 人と大学院生 1 人と共に、熊本県八代地域の藺草農家や製織工場、整経工場、織機工場を訪れ、農家や職人への聞き取りを行った。研究会では、地域と協働で福山市本郷町と熊野町において藺草栽培実践を行っているが、熊本は、その比較対象としての国内藺草栽培や畳表関連の最大・最先端地域である。2019 年 9 月には、織機再生工場での調査・打ち合わせと、熊本における地域遺産「水道祭り」の予備的な臨地調査を学生 2 人と共に行った。

備後地域外における地域遺産比較調査は、今後の課題としたい。遠隔地の情報収集などはネットや文献を通じて継続的に行っているが、本研究課題においては、臨地調査を待たず文献調査のみをもって代替の研究方法として論を結することはない。

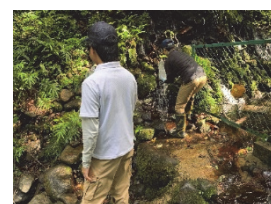


図 10-1 熊本の藺草圃場・製織工場・製経工場における研修・調査

図 10-2 熊本の水道水源調査

11. 結論

地域遺産の保全・継承についての知見と指針は各論の結語などに示す通りである。これまでの事例調査から、暫定規定している「地域遺産」の理念構築のために必要な要件を導くことができた。地域遺産とは、「有形無形を問わず、地域の人々が守り、後世に伝えたい地域の至宝であり、その保全・継承には、地域自らの遺したいという意味と、地域の自発・自律的な保全活動、またその継承を担保するための中核人物の存在するコミュニティが必要不可欠である。」冒頭述べたように「地域遺産」の概念は、さらなる事例調査を重ねることで常に再構築されるものである。

12. 今後の課題

本研究課題における備後地域における研究成果などが認められ、2020～2024年度 JSPS 科研費基盤研究(C)「藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明」(建築歴史・意匠分野)(研究代表:佐藤圭一)という長期の基礎研究費獲得に繋げることができた。研究方法は、これまで建築学の経験したことのない露地における藺草栽培という不確定要素を含むものである。途中の失敗が許される長期の研究期間が必要な基礎研究という位置づけである。

一方で、地域社会にインパクトを与える実践につながる研究成果を今後も目指したい。基礎研究と共に、これまでに「発掘」した地域遺産の保全と継承に資する教育・研究・社会活動を同時展開したい。本学のある福山市西部地域は沼隈半島の西端の付け根に位置し、半島東に草戸(明王院)、南に鞆の浦、中央に熊野町(藺草栽培のかつての中心地)、西に浦崎(現存唯一の備後柿渋工場)、その対岸に百島があるなど、地域遺産の宝庫である。

「地から知に、知を地に」の反復運動を掲げた本研究課題を通じて、「<地から成る／力なる>建築」を構築することが新たなテーマとして浮かび、研究展開を構想している。引き続き、「瀬戸内の里山・里海学」をテーマとする本学の研究ブランディング事業にも寄与できる調査研究を継続したい。研究期間内に実施できなかった備後地域外、あるいは世界の地域遺産との比較調査は社会状況を見極めつつ少しずつ進めてゆく。

研究遂行中の JSPS 科研費課題が終了する 2024 年度に、備後地域遺産研究着手(2015 年度福山大学着任)から節目の 10 年となる。備後藺草や備後置表を中心に、それまでの活動や研究成果を広く一般にも分かり易く 1 冊の本にまとめたい。

13. 謝辞

本研究遂行には産学官民、実に多くの方々のご支援いただきました。地域協働を研究方法とする本研究課題においては、特に臨地調査現場や地域の方々には、学生教育も含めて惜しみないご協力いただきました。感謝し尽くすことはできません。

感受性が強い備後地域遺産研究会の若い学生メンバーにとっては、地域社会や住民と直接対峙する本研究課題の方法は非常なストレスを伴うものであったと思います。そのような困難や戸惑いの中で、多くの学生が自らの卒業研究テーマに限らず研究プロジェクトに参加し、多岐にわたる臨地調査に興味をもって担ってくれました。今後の糧となることを祈りつつ、また協働できる日を心待ちにしています。

14. 関連著書・論文等

14-1 著書（分担執筆）

- (1) 「〈ケープタウン〉 ヤン・ファン・リーベックの街 アジアへの踏み石」, 「〈シドニー〉 流刑建築家の計画都市」など, 『世界都市史事典』(布野修司編), 昭和堂, pp.480-481, 836-843/全 976p, 2019.11
- (2) 「01-16 アフリカ 土着の家」, 『住まいの百科事典』(一般社団法人日本家政学会 住居学部会編), 丸善出版, pp.32-33/全 716p, 2021.4

14-2 査読論文

- (1) 佐藤圭一, 中嶋健明: 備後中継表の織機再生と製織技術継承, 住総研 研究論文集・実践研究報告集第 46 号, pp.243-252, 一般財団法人住総研, 2020.3 (研究・実践選奨受賞)

14-3 学会口頭発表

- (1) 佐藤圭一, 大岩智之: 絵図・古写真分析による阿部神社能舞台の建築年代推定 - 福山市に現存する能舞台と能楽堂の空間構成に関する研究 その 1-, 日本建築学会中国支部研究報告集, pp.899-902, 2019.3
- (2) 大岩智之, 佐藤圭一: 阿部神社能舞台の復元図面(意匠図)作製 - 福山市に現存する能舞台と能楽堂の空間構成に関する研究 その 2-, 日本建築学会中国支部研究報告集, pp.903-906, 2019.3
- (3) 佐藤圭一: 動力中継織機の再生(修理、復元、改良) 藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明 その 6, 日本建築学会大会学術講演梗概集(農村計画), pp.127-128 2020.9
- (4) 大岩智之, 佐藤圭一: 阿部神社能舞台の復元図面(構造図)作製 - 福山市に現存する能舞台と能楽堂の空間構成に関する研究 その 3-, 日本建築学会大会学術講演梗概集(歴史意匠), pp.81-82, 2019.9
- (5) 河田陽依菜, 佐藤圭一(設計指導)「都市の逃げ道 広島県福山市伏見町うっかり交流空間」 日本建築学会大会 デザイン発表会, 2019.9
- (6) 佐藤圭一, 大岩智之: 旧両社八幡宮能舞台の変遷過程と復元 - 福山市に現存する能舞台と能楽堂の空間構成に関する研究 その 4-, 日本建築学会中国支部研究発表会, 2020.3 (採択・発表会は中止)
- (7) 大岩智之, 佐藤圭一: 三蔵稲荷神社能舞台の実測図面作製とその保存・継承 - 福山市に現存する能舞台と能楽堂の空間構成に関する研究 その 5-, 日本建築学会中国支部研究発表会, 2020.3 (採択・発表会は中止)
- (8) 大岩智之, 佐藤圭一: 両社八幡宮から三蔵稲荷神社への能舞台の縮小移築 - 福山市に現存する能舞台と能楽堂の空間構成に関する研究 その 6-, 日本建築学会大会学術講演梗概集(歴史意匠), pp.89-90, (採択・大会は中止)
- (9) 佐藤圭一: 「ふるさと文化財の森」を活用した備後表継承会による普及啓発活動 藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明 その 7, 日本建築学会大会学術講演梗概集(農村計画), pp.89-90, 2020.9 (採択・大会は中止)

- (10) 岡田紘汰, 佐藤圭一, 長岡正芳, 大岩智之, 河田陽依菜: 備後中継表を活かした瀬戸内島嶼部・百島の商店再生 ―藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明 その8―, 日本建築学会大会 デザイン発表会, 2020.9 (採択・大会は中止)
- (11) 佐藤圭一: 「備後藺草による備後表」のトレーサビリティ実証実験 ―藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明 その9―, 日本建築学会大会, 2021.9 (投稿中・発表予定)
- (12) 河田陽依菜, 佐藤圭一: 備後中継表を活かした福山大学未来創造館茶室「育志菴」 ―藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明 その10―, 日本建築学会大会 (東海) 建築デザイン発表会, 2021.9 (投稿中・発表予定)

14-4 関連卒業研究・修士研究 (福山大学建築学科・大学院建築学専攻)

- (1) 橋高弘憲: 旧阿部神社能舞台の実測と記録, 2018年度卒業論文
- (2) 河田陽依菜: 都市の逃げ道 広島県福山市伏見町うっかり交流空間, 2018年度卒業設計
- (3) 大岩智之: 福山旧城下町に現存する能舞台の復元的研究 ―阿部神社能舞台と三蔵稲荷神社能舞台の保存と継承―, 2019年度修士論文
- (4) 井上誠一郎: 本郷島と長和島を中心とした松永塩田跡の変容(1962~2020年), 2020年度卒業論文
- (5) 佐藤貴行: 備後柿渋の製造工程に関する調査研究, 2020年度卒業論文
- (6) 河田陽依菜: ちゃぶ台から始まる都市 ―広島県福山市「2XXX年の都市計画」, 2020年度修士設計

14-5 報告書 (関連する2016年度~)

- (1) 佐藤圭一: 「地域遺産」としての備後表、明王院、別所砂留 ―備後地域遺産研究会2016活動報告―, 安全安心防災教育研究センター活動報告書2014-2016, pp.24-27, 2017.2
- (2) 佐藤圭一: 「地域遺産」としての備後表、無花果+蔵、備後柿渋、能舞台 ―備後地域遺産研究会2017活動報告―, 安全安心防災教育研究センター活動報告書2017, pp.60-61, 2018.9
- (3) 佐藤圭一: 「地域遺産」としての沼隈半島~瀬戸内島嶼部 ―備後地域遺産研究会2018活動報告―, 安全安心防災教育研究センター活動報告書2018, pp.37-40, 2019.9
- (4) 佐藤圭一: 「地域遺産」としての福山市西部地域 ―備後地域遺産研究会2019活動報告―, 安全安心防災教育研究センター活動報告書2019, pp.52-55, 2020.10

14-6 主な招待講演

- (1) 2018.6.4 「地域遺産としての備後表 ―その継承とブランド再構築―」, 研修生入構式記念講演会招待講演, ハイアットリージェンシー京都, 文化財豊保存会主催 (文化庁選定保存技術団体) (平成30年度『文化財豊保存会技術研修報告書』, pp.16-33, 2019.3)
- (2) 2020.10.11 「備後の『中継ぎ織り』を継ぐ」, ひろしまアトラウンジ事業「水野勝成とびんごい草」, 福寿会館, 公益財団法人ひろしま文化振興財団主催
- (3) 2020.12.10 「絶滅危惧の備後藺草と中継ぎ織り畳表」, 通常例会卓話, 福山ニューキャッスルホテル, 福山南ロータリークラブ主催

(4) 2021.3.21「備後畳表をユネスコ無形文化遺産へ ―日本建築文化を守る歩みに学ぶ―」, 人の歩みに学ぶ松永教室, 福山市西部市民センター, 福山市松永生涯学習センター主催

(5) 2021.6.6 (予定)「備後中継ぎ畳表の社会文化史 ―ユネスコ無形文化遺産を超えて―」, 文化講演会, 福寿会館, 福山城博物館主催

15. 研究費等（研究代表のみ）

15-1 本研究課題

2018～2020 年度 「地域遺産」の理念構築とその保全・継承に関する研究, 福山大学ブランディング推進のための研究プロジェクト, 240 万円 (60+100+80)

15-2 外部資金

2018 年度 住まい手主導の住宅設計支援システム開発に関する研究, 共同研究費, 有限会社アトリエ SORA, 30 万円

2019 年度 「地域遺産研究」, 研究助成寄付金, 株式会社メディカ・ライン, 30 万円

2020～2024 年度 藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明, JSPS 科研費基盤研究(C), 320 万円

15-3 福山大学教育振興助成金（関連する 2015 年度～）

2015 年度『『地域遺産』の保全と活用による地域デザインの可能性追求』 20 万円

2017 年度『『地域遺産』としての備後表、明王院、別所砂留の保全と継承』 20 万円

2018 年度「ギャラリー蔵を拠点とした福山市西部の地域デザイン」 20 万円

2019 年度「備後地域遺産研究会によるギャラリー蔵フォーラムの開催」 6 万円

（いずれも、学生の参加する社会連携活動に対する助成金）

16. 協働事業契約

2018 年度

ギャラリー蔵（福山市松永町）, 山脇産業株式会社（福山市松永町）

一般社団法人衣食住イノベーション協会（京都市）

2019 年度

有限会社佐野商店（福山市芦田町）, 農事組合法人ファーム立神（福山市本郷町）

公益社団法人広島県建築士会（広島市）, 株式会社 MNA アトリエ（兵庫県姫路市）

株式会社メディカ・ライン（東京都文京区）

2020 年度

瀬戸内まちなみ LABO（福山市鞆町）, NPO 法人ぬまくま民家を大切にする会（福山市沼隈町）

17. 主なメディア掲載など

2018 年度

- 4/10 中国新聞 「藩ゆかりの神社 2 能舞台を調査」
- 4/14 山陽新聞 「能舞台を次世代に 舞台図面化へ 福山大学建築学科が調査」
- 4/18 中国新聞 「手作り屋台地域に元気 1 台目松永で特産販売 福山大建築学科の 4 人」
- 5/1 中国新聞 「備後表継承へ団体 イグサ栽培・製造支援 魅力発進」
- 5/11 山陽新聞 「『備後表』後世へ 製造やイグサ栽培 担い手を育成」
- 5/13 毎日新聞 「地元産『備後表』後世に 後継者育成 技術結集し継承会」
- 6/13 中国新聞 オピニオン「公共空間に生かす発想を 備後置表と建築」
- 6/18 読売新聞 ひと in 福山「置は日本建築文化の核心」
- 7/14 山陽新聞 「伝統産業に理解を 本郷で刈り取り」
- 7/26 中国新聞 「イグサ収穫 備後表継承」
- 10/4 中国新聞 「福山大生、農家サポート イチジク屋台造りきっかけ」
- 12/3 中国新聞 「備後表 産地支える」
- 12/3 読売新聞 「備後表イ草苗を植え付け」
- 12/24 中国新聞シリーズ広告：福山大学ブランディング事業「瀬戸内の里山・里海学」④
「日本建築文化の核心 備後表」
- 3/16 山陽新聞 「阿部神社能舞台 往時の姿明らか」
- 3/27 中国新聞 「阿部神社に残る能舞台を CG 化 橘高さん卒論で実測」
(建築学科 4 年橘高弘憲の卒業論文記事)

2019 年度

- 4/3 NHK お好みワイドひろしま「鞆の浦の能舞台がピンチ！」,
保存継承インタビュー放映 (3/27 コメント取材)
- 7/11 中国新聞「イグサ収穫 長さ・色『良質』 福山市熊野 連作避け 3 年ぶり」
- 7/12 山陽新聞「『備後表』伝統つなごう 福山大生ら継承会と作業 イグサ刈り取る」
- 9/2 山陽新聞「備後渋 魅力に触れる 渋柿収穫や製造見学」
- 9/24 中国新聞「規格外イチジク ブランド化に力 福山・本郷特産」
- 10/12 中国新聞「『中継織』技術継承へ 備後表研究 福山大教授ら修理」
- 11/28 山陽新聞「中継織の動力織機復活」
- 12/1 中国新聞「イグサ苗植え置文化理解」
- 3/28 中国新聞「神社能舞台修士論文に 福山大学大学院今月修了の大岩さん
起源や構造 2 年かけ調査」(建築学専攻 M2 大岩智之の修士論文記事)

2020 年度

- 7/2 中国新聞「イグサ今年も豊作 福山で収穫」
- 7/29 中国新聞「備後表の織機再生 研究論文が高評価」
- 9/22 山陽新聞「「備後表」の復興目指す 福山大佐藤教授ら」
- 10/5 中国新聞「備後表継承会 初の実用化」
- 10/6 朝日新聞「地元いぐさの備後表 後世に 生産履歴を明示」
- 10/22 NHKお好みワイドひろしま「中継・備後表継承へ動力織機を復活」(大学より生中継)
- 11/15 中国新聞「備後表用イグサ植え付け」
- 1/16 中国新聞「福山大院生1級級建築士合格にぎわいづくり夢描く」
(建築学専攻 M2 河田陽依菜)
- 2/7 読売新聞「「備後表」技術継承に力」(ニュースの門@広島)
- 3/11 中国新聞「備後を誇る 備後表 産地・技継承 産学で探る」
- 3/18 FM ふくやま「GO! GO! B びんご」出演(福山大学未来創造館茶室「育志菴」にて収録)
- 3/30 中国新聞「卒論で備後の文化継承訴え 柿渋作りと塩田跡の変遷」
(建築学科4年佐藤貴行と井上誠一郎の卒業論文記事)
- 2021/4/24 中国新聞「備後表織機の製造 記録 福山大の佐藤研究室 写真や動画撮影」

18. あとがきにかえて

本研究課題着手直前の寄稿を引用したい。3年間果たして、地域社会に何か残せたのだろうか。

が、あの「近代」建築遺産にはそれなりの愛着もある。福山大学に着任し、これまで縁のなかった福山西部地域に住むことになった。かつて塩田、下駄、備後表の伝統産業で栄えた地域である。地元の建築専門家として、最高級備後表の畳を自室に敷きたいと思ったのが事の始まりである。金に糸目はないから欲しい、と。

ところが、「備後蘭草による備後表」の入手ルートがない。もはや絶滅の危機らしい。日々忙殺され、夏が過ぎ、秋が終わった頃、蘭草を植え付けるといふ話を聞き、福山市能野町の田んぼへ向かった。そこで出会ったのが、畳表製造卸「佐野商店」の先代社長、故佐野良信氏である。その場はいささかで終わったが、先代の誘いで、今は大学近くで蘭草を栽培している。中継織の技術継承も試みている。

先代の遺志を継いだ長男の達哉社長と有志学生が協働して2年目となる。1枚の田んぼには、「備後地域遺産研究会之圃場」の看板を掲げている。有形無形を問わず、地域の人々が守り、後世に伝えたい地域の至宝を「地域遺産」という。先賢の意思である、地域遺産としての備後表を継承したい。

(福山大建築学科教授・地域遺産研究会主宰)

高校卒業以来、四半世紀ぶりに福山に戻った。福山を離れ、建築や都市、地域のことを考えてきた。ヨーロッパ近代の植民都市計画を最初の研究テーマとして、南アフリカに20年近く通い続けた。熊本大学に赴任してからは、ひよんな出会いから水俣市の農村集落における地域水道に興味をもった。集落維持の仕掛けでもある春秋の水道祭りには今も通っている。

想



さとう けいいち
佐藤圭一

備後の「地域遺産」

生まれも育ちも旧福山城下町の私は、城跡が最高の遊び場であった。「忍者の修行」といって、お城の石垣は、小学生のとき仲間たちとほぼ登り尽くした。鉄筋コンクリート再建天守も築造から半世紀が過ぎ、その保全が議論されている。日本が一番に完成させるくらいの本気があるなら、私は木造再建派である。歴史マニアや文化財の専門家には怒られるかもしれない

図 18-1 2018. 3. 25 中国新聞セレクト「想」(中国新聞社転載許諾)



2018～2020 年度

福山大学ブランディング推進のための研究プロジェクト報告書
「地域遺産」の理念構築とその保全・継承に関する研究

2021 年 5 月 14 日 初 版第 1 刷発行（提出版）

2021 年 5 月 14 日 初 版第 2 刷発行（カラー表紙付印刷用）

2022 年 11 月 27 日 第 2 版第 1 刷発行（ウェブ公開用）

編著者 佐藤圭一＋備後地域遺産研究会

729-0292 広島県福山市東村町字三蔵 985-1 福山大学建築学科

E-mail : keis@fukuyama-u.ac.jp

